

吉志部瓦窯跡

(府営岸辺住宅建替に伴なう発掘調査報告書)

1987年10月

大阪府建築部
大阪府教育委員会
吹田市教育委員会



調査地全景（東南から）



調査地全景（北東から）

序

吹田市は、地質的に良質な粘土と砂を含む、なだらかな起伏をもつ千里丘陵が、市域の北部から中央部にかけて大きく展開しており、古墳時代後期には、これを原料として須恵器の生産が大規模に行われた、我が国有数の製陶地帯がありました。

須恵器の生産が終了した以後においても、官営造瓦窯として聖武朝難波宮の造営に伴う瓦窯（史跡 七尾瓦窯跡）や桓武朝平安宮の造営瓦窯（史跡 吉志部瓦窯跡）が操業されるなど、古代窯業史上において重要な役割を果たしてきました。

昭和60年度に、本市に二箇所ある史跡の一つである吉志部瓦窯跡の東南に近接する府営岸辺住宅の建替計画に伴い、大阪府と事前協議を行い、7箇所のトレンチを設定し、試掘調査を実施したところ、このうち、2箇所から遺物の検出がありました。このため、昭和61年度に1421m²の発掘調査を実施しました。

本書は、この調査成果を掲載したものですですが、調査に際し大阪府文化財保護課、及び住宅建設課の御指導、御協力を賜りましたことを誌上をお借りし、厚くお礼申し上げます。

昭和62年10月31日

吹田市教育委員会

教育長 長光達郎

例　　言

1. 本書は吹田市岸部北4丁目390番地、他の大阪府営岸辺住宅の建替工事に伴う事前調査として、大阪府建築部住宅建設課から委託を受けて大阪府教育委員会・吹田市教育委員会が実施した発掘調査の報告書である。
2. 調査に要した経費は全額、府住宅建設課の負担による。
3. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師、今村道雄が担当し、その指導のもとに吹田市教育委員会社会教育課文化財担当職員、増田真木が現地における調査を担当した。発掘調査は昭和62年1月14日から3月31日まで実施した。
4. 資料の整理作業、及び報告書の作成は吹田市教育委員会が行い、吹田市青山台2丁目5番地、青山台小学校内の社会教育課文化財分室において、昭和62年6月1日から10月31日まで実施した。
5. 資料の整理作業においては、調査参加者以外に、鹿庭公子・川越邦江・横田明・石山智美・山川康子・大藤晴代の協力を得た。
6. 本書の執筆は第3章を池田正道と増田が、第4章d(2)を川越邦江が、他は増田が分担して執筆した。
7. 図中の方位は座標北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
8. 本文中の遺物番号は図版・挿図とも統一した。縮尺については、土器は1:4、瓦は1:5、石器は2:3である。
9. 本報告書に使用した航空写真については、大阪府教育委員会の提供による。
10. 発掘調査の実施、及び資料整理においては、大阪府文化財保護課、府住宅建設課、吉志部神社、埼玉県立歴史資料館酒井清治氏、宇治市教育委員会杉本宏氏、関西大学大下明氏はじめ多くの方々から協力や資料の提供を得た。記して謝意を表したい。

発掘調査参加者一覧

調査主体 大阪府教育委員会 教育長 浅野素雄
吹田市教育委員会 教育長 長光達郎

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課 係長堀江門也・係長中井貞夫

調査担当者 大阪府教育委員会文化財保護課技師 今村道雄
吹田市教育委員会社会教育課 増田真木

調査員 池田正道・篠原年克

調査補助員 岡野康範・元地裕・橋井和佳子・高岡郁子・麗准子 宇都宮公子

目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 既往の調査.....	3
第3章 位置と環境.....	10
第4章 調査の成果.....	19
第5章 ま と め.....	56

図 版 目 次

図版1 調査地点近景
図版2 調査地点航空写真
図版3 A区第2次面全景
図版4 A区粘土探掘坑検出状況(1)
図版5 A区粘土探掘坑検出状況(2)
図版6 A区粘土探掘坑検出状況(3)
図版7 A区粘土探掘坑検出状況(4)
図版7 A区粘土探掘坑検出状況(5)
図版9 溝(S D01)検出状況(1)
図版10 溝(S D01)検出状況(2)
図版11 遺物出土状況
図版12 B区調査状況
図版13 A区第3次面全景
図版14 A区小穴群検出状況(1)
図版15 A区小穴群検出状況(2)
図版16 C区第3次面検出状況
図版17 出土瓦・窯道具(1)
図版18 出土瓦(2)
図版19 出土石器

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点位置図.....	1
第2図 H1号窯実測図.....	3
第3図 古志部瓦窯跡地形図.....	4

第4図	N 1号窯実測図	5
第5図	出土瓦拓影	6
第6図	吉志部瓦窯跡出土瓦	7
第7図	吉志部瓦窯跡出土窯道具実測図	8
第8図	高浜神社出土軒丸瓦実測図	9
第9図	周辺地域地質図	10
第10図	千里丘陵周辺遺跡分布図	11・12
第11図	発掘調査地点周辺図	19
第12図	調査区平面図	20
第13図	A区北壁土層断面図	23・24
第14図	B区東壁土層断面図	25
第15図	C区北壁土層断面図	26
第16図	A区第1次面遺溝実測図	28
第17図	第2次面遺溝平面図	29・30
第18図	A区第2次面遺構平面図	31・32
第19図	S K01・S K02・S K03・S K04実測図	33
第20図	S K05・S K06実測図	34
第21図	S K07実測図	35
第22図	S K08・S K09実測図	36
第23図	S K10実測図	37
第24図	S K11実測図	38
第25図	S K12・S K13実測図	38
第26図	S K14実測図	39
第27図	S K15実測図	40
第28図	C区第2次面遺構平面図	41
第29図	T 1平面図	42
第30図	S D01断面図	42
第31図	A区第3次面平面図	43・44
第32図	出土瓦・窯道具実測図（1）	46
第33図	出土瓦実測図（2）	47
第34図	出土瓦実測図（3）	49
第35図	出土石器実測図	50
第36図	出土土器実測図（1）	52
第37図	出土土器実測図（2）	54
第38図	吉志部瓦窯遺構実測図	59

第1章 調査に至る経過

吹田市岸部北4丁目1388、1388-2に所在する吉志部瓦窯跡は岸部五ヶ村の鎮守である、吉志部神社（太神宮）の境内地に所在する。そのため、周辺においては名神高速道路建設工事等によって旧状が大きく損なわれた地域もあるが、瓦窯跡一帯は、大きな開発の手から守られ、今日まで、丘陵地形が良く残されている。

昭和43年には大阪府教育委員会によって、瓦窯跡の発掘調査が実施され、平安宮造営当初の大規模な造宮瓦窯跡であることが確認され、その重要性に鑑み、昭和46年6月には国の史跡に指定された。そして、史跡指定後は神社境内を開む史跡一帯が史跡公園として整備され、現在、瓦窯跡一帯は良好な状況で保存されている。

しかし、一方で、瓦窯跡の周辺地域に目を向けると、大規模な開発の手は及んでいないものの、近年、瓦窯跡南方の水田地帯を中心に木造建売住宅を主とする、小規模住宅開発が徐々に進行し、瓦窯跡を巡る状況は徐々に変化している。このような情勢の中、吉志部瓦窯跡の東南



第1図 発掘調査地点位置図 (S=1:40000)

の岸部北4丁目390番地、他に位置する大阪府営岸辺住宅の建替が計画され、埋蔵文化財への対応について、大阪府から吹田市教育委員会に対して、事前協議がなされた。

この建替事業は吉志部瓦窯跡の周辺としては初の大規模な建設工事であることから、市教育委員会は府文化財保護課を含めて慎重に協議した結果、当該地は吉志部瓦窯跡に南接しており、造瓦関連工房の存在する可能性があること、及び周辺地に先土器・鎌倉時代の遺跡が存在することから、事前に試掘調査が必要であるとの判断を示した。

この事前協議を受けて、市教育委員会は昭和60年9月、及び61年2月に、 $17,445\text{m}^2$ の府営住宅の敷地内において、計7箇所のトレンチ（ $2\text{m} \times 2\text{m}$ ）を設定して試掘調査を実施し、その結果として、瓦窯跡に近接する2箇所の試掘調査地点で平安時代の瓦、及び古墳時代の須恵器の出土を確認した。

この調査成果を受けて、再度の協議の結果、建設工事に先立って、遺物の出土した2箇所の試掘調査地点にかかる住棟2棟、及び住棟間の道路部分の計 1421m^2 について発掘調査を実施することになった。

発掘調査は大阪府教育委員会、及び吹田市教育委員会が大阪府知事から委託を受けたが、現地における実際の発掘調査、及び出土遺物の整理と報告書の作成については、吹田市教育委員会が実施することとした。調査に要した経費は全額、大阪府の事業負担による。なお、現地における発掘調査は年度末に完了するため、出土遺物の整理と報告書の作成については、昭和62年度事業として実施することとし、昭和62年6月1日付で、内業調査の委託契約が結ばれた。



調査風景

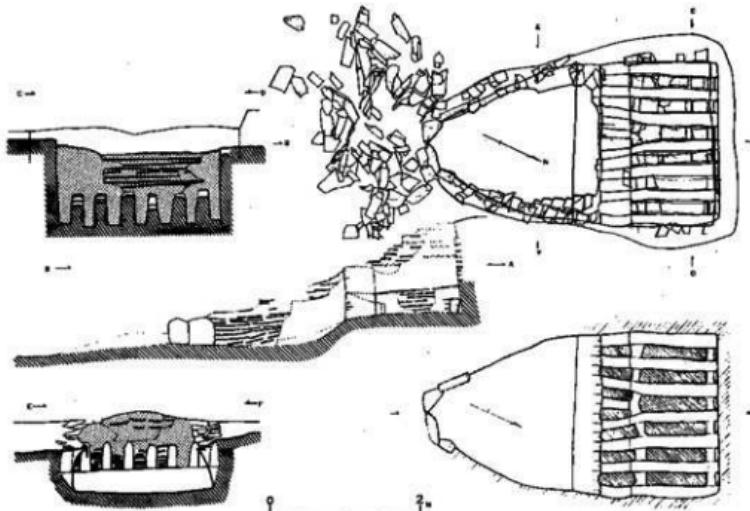
第2章 吉志部瓦窯跡の既往の調査

吉志部神社背後の境内地から古瓦が出土することは、古くから知られており、昭和3年には神社西北隅から綠釉平瓦片が採集されたことが記録されている。次いで、昭和5年に、天坊幸彦氏は『三島郡の史跡名勝天然記念物』において、出土した蓮華紋系瓦の中に綠釉瓦が混入していることから、綠釉瓦を焼成した瓦窯であることを指摘し、吉志部瓦窯跡の実態の一部を明らかにした。

その後、昭和8年9月には登窯（後の大阪府教育委員会の調査によるN-3号瓦窯）が発掘調査され、その成果の一部は9月25日付大阪朝日新聞に報道された。

昭和16年には、藤沢一夫氏は「摂河泉出土古瓦の研究」において、平安宮出土品と大同小異の紋様のものが見出されること、及び綠釉を施したもののが存在することから、本瓦窯跡から平安宮へ瓦が供給された可能性があることを指摘しており、吉志部瓦窯跡の性格について、初めて、本格的な検討がなされたのである。

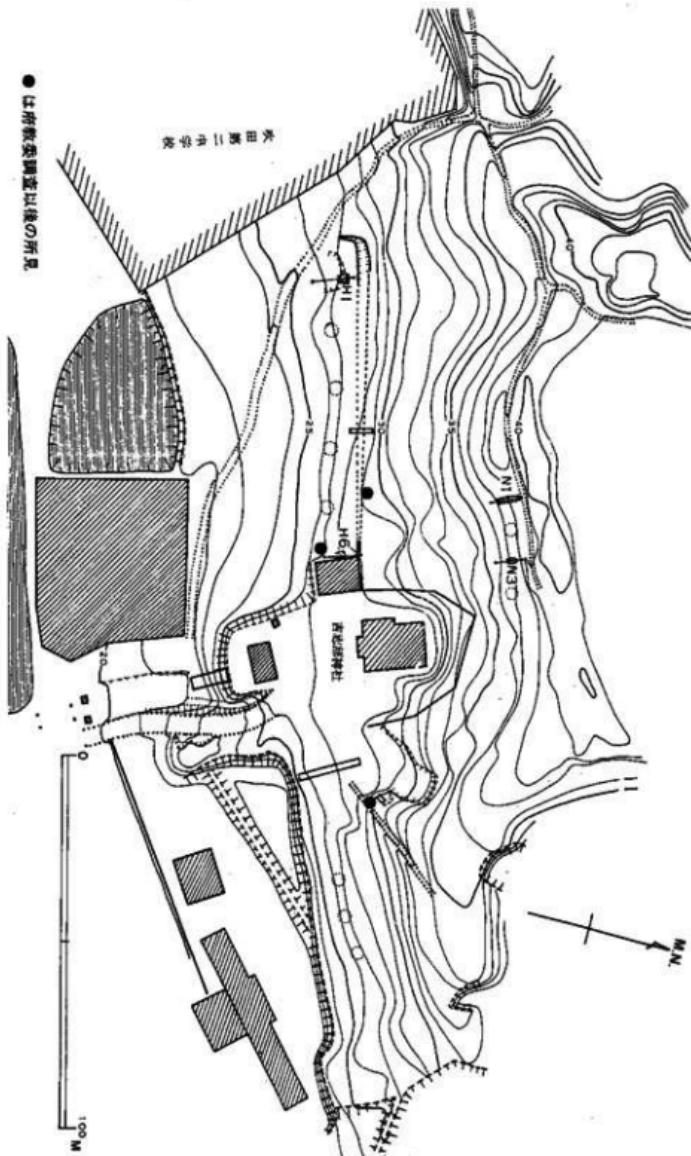
戦後になると、昭和38年、市内で研究活動を続けていた鍋島敏也氏は神社東下の池端より綠釉瓦を採集するとともに、紫金山山腹の踏査により、6基の瓦窯跡の存在を確認した。さらにその内、壁土の採土坑に露出していた瓦窯を精査し、実測して、多条ロストル構造の平窯であ



第2図 H1号窯実測図（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載）

●は府教委調査以後の所見

第3図 古志部瓦窯跡地形図（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査報告」に加筆）

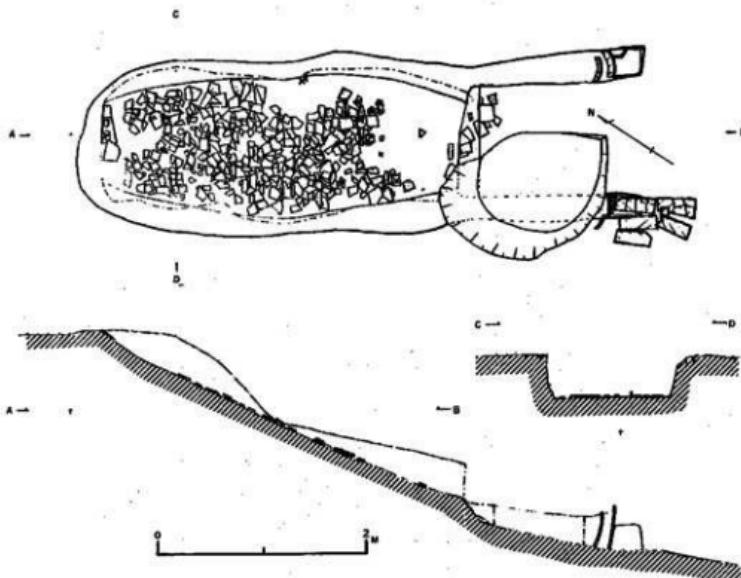


ることを『古代学研究38号』に発表した。これによって、瓦窯構造の様相が初めて明らかにされた。

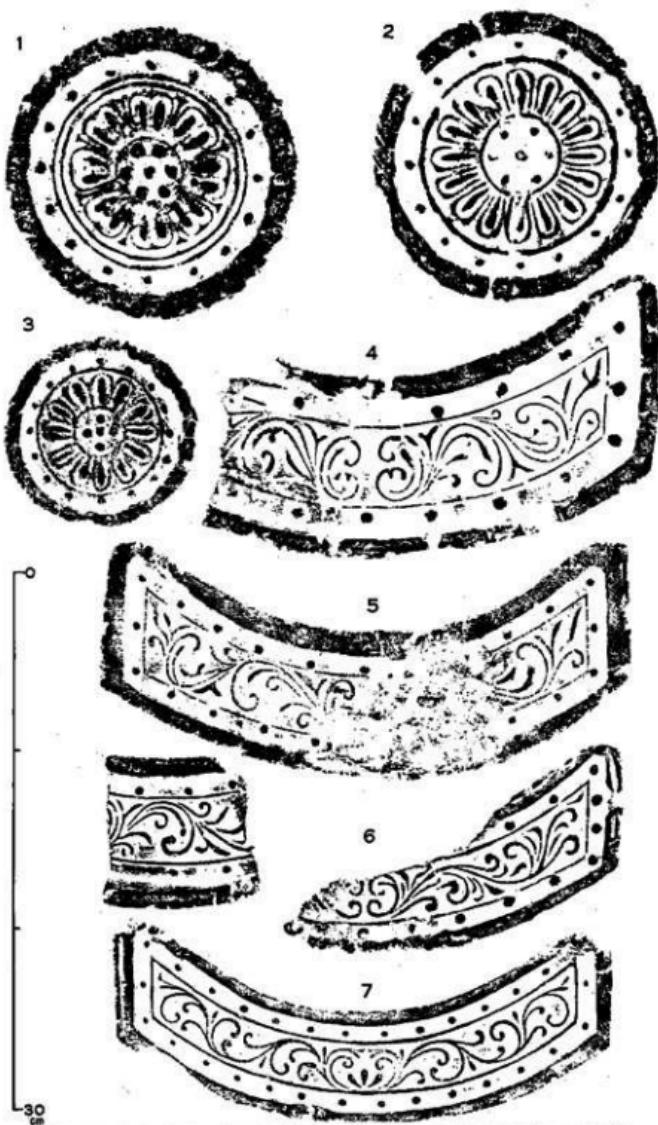
その後、昭和42年、本瓦窯跡の研究を続けてきた藤沢氏は、「日本の考古学VI(歴史時代上)」において、昭和8年に実施された発掘調査、及び鍋島氏の調査成果を受けて、瓦窯構造の検討を行うとともに、出土した軒丸瓦が平安宮出土のものと同範であり、縁軸瓦、及び窯道具が認められること等を指摘し、本瓦窯が平安宮の造宮瓦窯であることを確定している。

このように、本瓦窯跡は藤沢氏によってその歴史的評価が下されたが、この頃から、神社周辺の丘陵は壁土として良土を産るために、土取り等がひんぱんに行われ、窯体が露出した部分が出はじめた。このため、瓦窯跡の今後の保存対策を抜本的に考え直す必要に迫られ、窯体の一部を本格的に調査することとなり、昭和43年2~3月にかけて大阪府教育委員会、藤沢一夫・堀江門也両氏によって発掘調査が実施された。

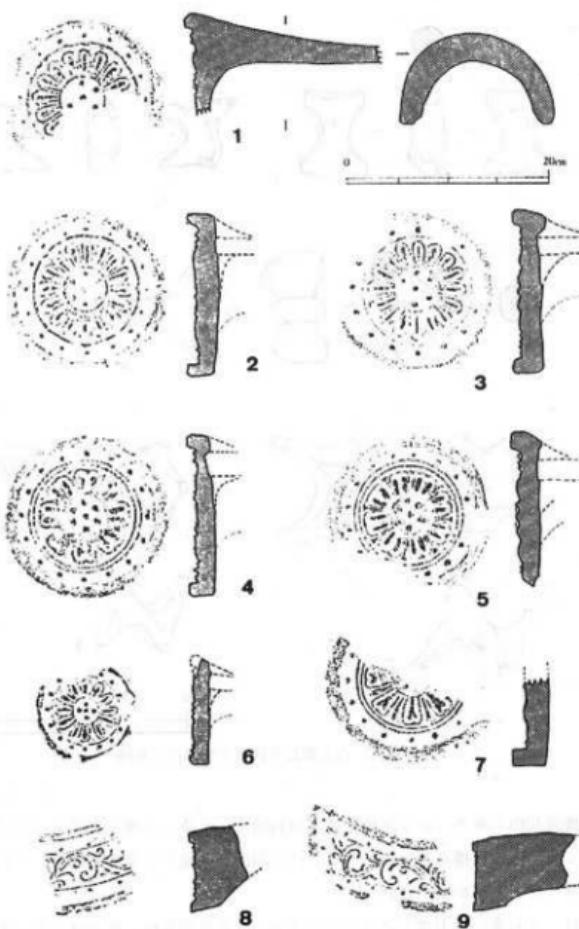
調査は、平窯2基(H-1・H-6号窯)・登窯2基(N-1・N-3号窯)の発掘調査、そして平窯群の背後を走る排水溝の調査も行われた。又、神社境内地全域の測量調査を実施し、一帯のボーリング調査によって平窯9基、登窯4基の合計13基の窯跡が存在することを明らかにした。



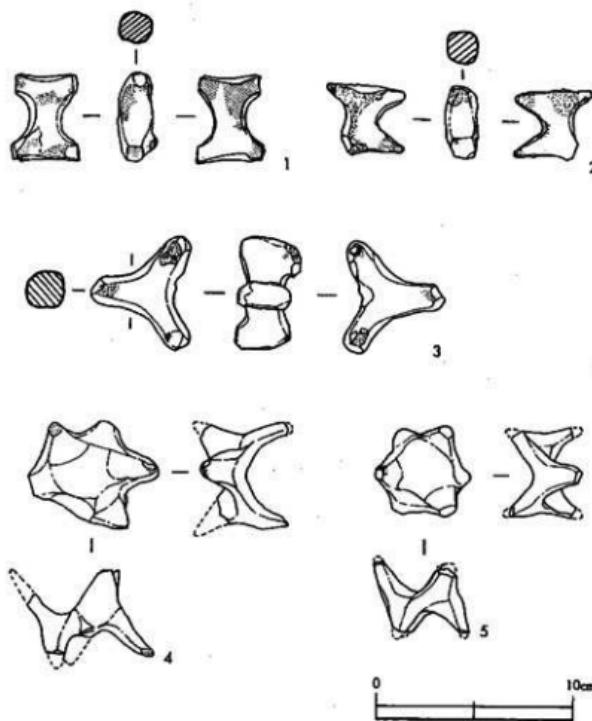
第4図 N1号窯実測図（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載）



第5図 出土瓦拓影（大阪府教育委員会「岸部瓦窯跡発掘調査概報」より転載）



第6図 吉志部瓦窯跡出土瓦



第7図 古志部瓦窯跡出土窯道具実測図

瓦窯は標高40mの東西に走る洪積丘陵の南斜面に、丘陵の下部と上部の二段に規則的に配列されている。下部には標高27~28mラインに平坦面を造成して平窯を構築しており、上部には標高37mラインで登窯が検出された。

平窯（H-1号窯）は半地下式ロストル式平窯で全長約5m、焼成室は奥行1m、幅2mの長方形をなし、1号窯と6号窯の窯体構造の検討から、各平窯が規格性の高いものであることを示している。又、登窯は（N-1号窯）は全長6m、幅1.3mを測る、半地下式有階無段式登窓である。焼成部床面には一面に平瓦細片が敷き詰められており、綠釉の点滴が認められたことから、本瓦窯で綠釉瓦、及び綠釉陶器の焼成が行われていたことが確認された。

調査概報において、藤沢氏は本瓦窯が平安宮への供給瓦窯でありながら、『延喜式』の撰録に漏れていますことから、小野・栗栖野瓦窯跡に先行する平安宮創建時の急時の大量需要に対応す

るための臨時的な瓦窯であると位置づけた。

又、窯跡以外には造瓦工房址と考えられる遺構は確認されておらず、丘陵一帯の詳細な調査の必要性を指摘した。

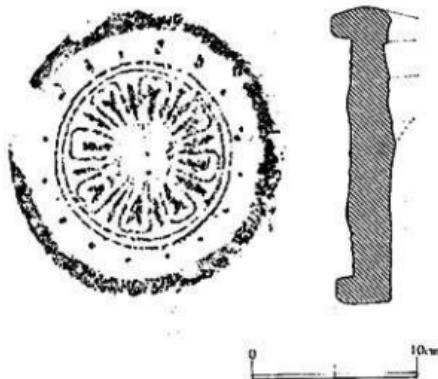
発掘調査後、昭和46年の史跡指定に伴なう公園整備において、新たに2基の瓦窯が確認され、瓦窯の配列や構造が、より複雑な様相を示すとともに、古式を呈する小型瓦窯の存在が報告される等、新たな問題を提起した。

公園整備以後、昭和47年の吉志部1号墳の発掘調査において、瓦・灰の堆積層を確認しており、さらに、新たな瓦窯の存在も想定された。又、昭和50年1月には、社務所の改築に伴なって、市教育委員会により事前に発掘調査が実施され、平窯群の背後を走る排水溝を確認した。

なお、発掘調査以外の知見として、瓦窯跡の南方2.3kmの高浜町に所在する高浜神社では、昭和11年の社務所の改築に際して、古瓦の出土が伝えられており、その内の軒丸瓦一点が、吉志部瓦窯跡のものと同範である。発掘調査によるものではないが、唯一の市内出土例として、注目すべき資料である。

以上のように、吉志部瓦窯跡は早くから学界に注目されたが、これまでの調査では瓦窯、及び排水溝のみが調査対象となっており、それに伴なう、造瓦関連工房にまで調査範囲が及んだことはなかった。

しかし、今回の府営住宅建替にともなう調査、及び昭和62年3月に実施された、吹田市岸部北4丁目110番地（日本ペイント寮内）における調査において、従来不明であった吉志部瓦窯跡の関連工房の一端を明らかにする事ができた。この昭和61年度に実施された2件の調査によって、吉志部瓦窯跡は新たな研究の段階を迎えたともいえる。



第8図 高浜神社出土軒丸瓦実測図

第3章 位置と環境

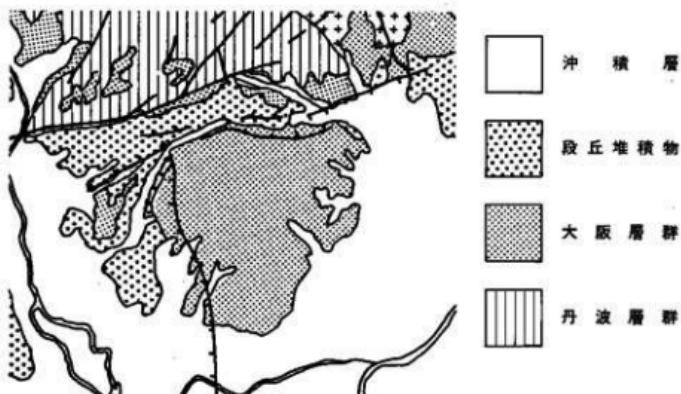
吹田市は大阪府の中央北部に位置し、昭和15年、吹田町を中心として、岸部村、千里村、豊津村を合併して成立し、その後、新田村下新田地区と山田村が加わって、現在に至る。旧行政単位では、豊津村が豊能郡（もと豊嶋郡）で、他は島下郡であるというように、本市は旧郡を越えて合併した市である。

吹田の地は、古くは西から京に向かう交通の要地として栄え、現在は大阪市に近接することから、昭和初期から丘陵縁辺部を中心に、住宅開発が進んできた。特に、千里ニュータウンの造成や万国博覧会の開催以後、市勢の増大に伴なって急速に宅地開発が進み、住宅都市としての性格が強い。

吹田市を地理的に概観すると、大きく2つの地域に大別できる。一つは市域中央から北半部を占める丘陵地帯であり、いま一つは東から南半部の淀川と安威川が、上流から運び込んだ土砂によって形成された沖積平野である。

市域中央から北半部を占める丘陵は千里丘陵と呼ばれ、地質的には淀川以南の枚方丘陵や泉州丘陵等とともに大阪湾岸に広く分布する、砂礫や粘土で構成される前期洪積世の大坂層群の隆起地形である。その規模は、東西10km、南北8kmに及び、吹田市の北半、豊中市の東半、箕面市と茨木市の一部を含む。

丘陵の最高地点は豊中市鳥熊山の北方で、標高133.8mを測るが、丘陵の隆起運動が西からの突き上げによって行なわれたため、概して西方が高くなってしまい、吹田市域では50～80m程度のなだらかな丘陵となっている。泉州丘陵に比べて開析は浅いが、概して複雑に入り組んだ尾



第9図 周辺地域地質図 S=1:200000 (財国土開発技術センター「近畿地方土木地質図」より作成)



第10図 千里斤湖周辺道路分布図 (S = 1 : 40000)

根状地形をなしている。丘陵南辺については垂水町～円山町において、軟弱な洪積丘陵が海進によって侵食された海蝕崖となっており、独特の緩やかなカーブを描いて吹田方面に展開し、その東端では砂洲上に安威川に突き出て吹田砂堆を形成し、旧吹田町はこの川に面した高台に発達した河港の町である。

調査地点は、この千里丘陵の東南端の紫金山と称される支丘陵に南接する微高地であり、洪積丘陵と沖積平野が接する地点である。紫金山は佐井寺集落の東部を起点として、東南に向かって標高40m前後で伸び、平野に突出する部分で北東に屈曲して駒ヶ池の南を東に伸びる。紫金山丘陵の南斜面には平安宮造宮瓦窯跡である吉志部瓦窯跡が、東端の北斜面には難波宮造宮瓦窯跡である七尾瓦窯跡が位置している。

そして、この丘陵の南方には安威川や淀川へ流下する小河川が形成した微高地が広がり、沖積平野へと続いている。

この、市の南部を占める沖積平野は大阪平野の一部であり、大阪平野は千里丘陵と上町台地を結ぶラインを境として、東側の北摂平野と河内平野、南側の和泉平野、西北側の西摂平野とに分けられる。この沖積層は難波累層と呼ばれ、洪積世の最末期から沖積世にかけて堆積した地層である。洪積世の晩期にはウルム氷期の影響により、寒冷で海平面も低く、当時の大阪湾は陸地であり、西へ傾く斜面となっていた。沖積世に入ると、温暖化し、海平面も上昇して、河内地域にまで海面は侵入して内湾となり、千里丘陵南端も海水に浸食される状況であった。その際、千里丘陵と上町台地における砂堆が沿岸州となり、陸化を早めたことは注意せねばならない。すなわち、当地周辺は大阪平野において、比較的早い時期に陸化した地域であるといえよう。

以上のような環境のもとで、千里丘陵においては、先土器時代から、人々の活動の痕跡が認められる。先述したように、この時期は大阪湾は陸化しており、千里丘陵縁辺部は見晴らしのきく良好な生活環境を有していたと考えられ、本市域では吉志部遺跡と垂水遺跡の2つの遺跡が確認されている。吉志部遺跡は丘陵東南斜面に位置し、ナイフ形石器・削器・錐状石器・石核等約50点が確認されている。垂水遺跡は丘陵南端に位置し、ナイフ形石器・石核等が約10点が確認されている。

縄文時代に入ると、温暖化とともに海面の上昇により、当地周辺の環境は大きな変化をみせる。人々の暮らしは丘陵の縁辺部、特に開析谷の周辺に営まれる傾向にあり、吉志部遺跡、豊中市野畠遺跡等の存在が知られている。吉志部遺跡では、石鐵・錐状石器・楔形石器等が出土しており、野畠遺跡では後期の土器・石鐵・錐状石器等が出土している。洪積丘陵の開析谷縁辺部に位置する遺跡では、吉志部遺跡のように石鐵を中心とする石器類の散布のみが認められる場合が多く、狩猟活動の作業場的な性格が推定されている。その他、七尾瓦窯跡下層遺構では晩期の船橋式土器が出土し、豊島郡条里東限界遺跡では後期の土器がわずかであるが出土している。

弥生時代には稻作の伝播に伴ない、人々の生活が丘陵内から平野部へと、その基盤を移し、

付表1 千里丘陵周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	種類	時代	備考
1	白頭瓦窯跡	吹田市 山田白頭	瓦窯跡	奈良時代	
2	山田銅鐸出土地	山田小川	銅鐸出土地	弥生中期	外緣付紐式鐸
3	青葉丘遺跡	青葉丘南	遺物散布地	弥生後期	昭和56年度試掘調査
4	松下保健センター古墳	青葉丘南十番	古墳	古墳後期	須恵器杯・壺・提瓶出土
5	新芦屋古墳	新芦屋上	古墳	古墳後期	木芯粘土窓墳 7世紀初頭
6	新芦屋瓦窯跡	新芦屋下	瓦窯跡	平安	
7	陶棺出土地	千里丘北	陶棺出土地	古墳後期	
8	新芦屋遺跡	千里丘北	遺物散布地	弥生 中・後期	
9	假彈寺裏山陶棺出土地	長野東	陶棺出土地	古墳後期	
10	陶棺出土地	山田西	陶棺出土地	古墳後期	
11	陶棺出土地	山田下続	陶棺出土地	古墳後期	
12	七尾瓦窯跡	岸部北	瓦窯跡	奈良後期	聖武朝難波宮 造営瓦窯跡
13	吉志部1号墳	岸部北	古墳	古墳後期	無袖式横穴式石室 7世紀初頭
14	吉志部瓦窯跡	岸部北	瓦窯跡	平安	平安京造営瓦窯跡
15	吉志部火葬墓	吉志部神社境内	火葬墓	奈良末期	須恵器藏骨壺
16	吉志部遺跡	岸部北	遺物散布地	先土器 縄文・弥生	
17	陶棺出土地	原町	陶棺出土地	古墳後期	
18	S T32号須恵器窯跡	朝日ヶ丘	須恵器窯跡	古墳後期	昭和60年度調査
19	操車場遺跡	天道町	遺物散布地	鎌倉・室町 瓦器・土師器小皿 土釜等出土	
20	中ノ坪遺跡	岸部南	遺物散布地	古墳・奈良 後期・中世	須恵器・瓦器出土
21	片山公園遺跡	片山町	遺物散布地	弥生 古墳後期	埴輪出土
22	出口古墳	出口町	古墳	古墳後期	横穴式石室 6世紀初頭
23	千里須恵器窯跡群		須恵器窯跡	古墳後期	
24	都呂須遺跡	内本町	遺物散布地	弥生・ 鎌倉・近世	昭和56年度調査 鎌倉時代大溝検出
25	遺物出土地点	高浜町	遺物散布地	古墳前期 平安	吉志部瓦窯と同范軒丸瓦 出土
26	豊島郡条里東限界遺跡	泉町	条里遺構	鎌倉	郡条里東限界水路検出
27	金田遺跡	南金田	遺物出土地	古墳前期	
28	五反鳥遺跡	南吹田	旧神崎川 河道跡	弥生・中世	河道、堤防跡検出。唐鏡 鏡、鐵鍬、刀子
29	垂水南遺跡	垂水町	集落遺跡	弥生・古墳 中世	古墳時代・堅穴住居・掘立 柱建物・矢板拘・環等検出
30	垂水遺跡	垂水町	集落遺跡	旧石器 弥生・宝町	弥生時代・堅穴住居 焼土坑等検出

31	垂水西原古墳	吹田市 千里山西	古 墓	古墳前期	石室材、石棺材確認
32	感神宮石棺出土地	江坂町	石棺所在地	古墳後期	7世紀初頭、家形石棺蓋 竜山石製
33	櫻坂遺跡	江坂町	遺物散布地	鎌倉・宝町	鎌倉時代畦畔検出
34	藏人遺跡	江坂町・豊津町	遺物散布地	古墳・鎌倉	古墳時代河道路、鎌倉時代築立柱遺物跡、井戸跡、宝町時代井戸跡検出
35	北条遺跡	豊中市 北条町	集落遺跡	弥生後期 古墳	
36	小曾根遺跡	北条町・小曾根	集落遺跡	弥生前一後 期・鎌倉	方形周溝墓(中期)
37	服部遺跡	服部	集落遺跡	弥生・平安 中世	
38	穂積遺跡	穂積	集落遺跡	弥生後期 古墳・鎌倉	古墳後期、円墳周溝検出
39	島田遺跡	米町	集落遺跡	中世	
40	上島津南遺跡	上津島	集落遺跡	平安時代	木棺墓検出
41	上島津遺跡	上津島	集落遺跡	弥生後期 古墳	
42	利倉遺跡	利倉南町	集落遺跡	古墳～中世	古墳時代水路、木組検出
43	利倉西遺跡	利倉西	集落遺跡	弥生後期 古墳	
44	勝部遺跡	勝部二丁目	集落遺跡	弥生・古墳	
45	桜塚古墳群	桜塚・岡町	古 墓	古墳中期	36基
46	大石塚・小石塚古墳	岡町北	古 墓	古墳中期	
47	原田神社銅鐸出土地	岡町北	銅鐸出土地	弥生中期	流水文銅鐸
48	大塚古墳	中桜塚	古 墓	古墳中期	
49	御獅子塚古墳	中桜塚	古 墓	古墳中期	
50	新免遺跡	五井町	集落遺跡	弥生～近世	
51	御神山古墳	堂池中町	古 墓	古墳前期	三角縁獸帶三神三獸鏡
52	待兼山古墳	待兼山町	古 墓	古墳前期	唐草文帯四神四獸鏡
53	野畠遺跡	西緑丘三丁目	繩 文		
54	桜井谷須恵器窯跡群		須恵器窯跡	古墳後期	
55	峰前寺遺跡	摂津市 千里丘	遺物散布地	古墳～中世	
56	明和池遺跡	庄屋	遺物散布地	古墳後期	
57	和道遺跡	鳥飼和道	遺物散布地	古墳～中世	
58	東奈良遺跡	茨木市 東奈良	集落遺跡	弥生前期～ 古墳	銅鐸鏡範出土
59	牛乳遺跡	中津町		繩文晚期	水路、堰検出
60	見付山古墳	見付山	古 墓	古墳後期	横穴式石室、組合式石棺
61	上寺山古墳	中穂積	古 墓	古墳後期	かまど塚

大河川に面する低地等に大規模な集落が営まれ始める。この時期には、千里丘陵周辺では、遺跡数は急激に増加する。弥生文化の波及は猪名川流域を含む、西摂平野がやや早いが、ほぼ前期中頃には千里丘陵周辺部にまで到達したと考えられ、丘陵南方の沖積平野は西摂地域と、三島地域の中間地域として一つの遺跡群を形成する。

千里丘陵東南端に立地する、垂水遺跡では少量の前期弥生土器が出土しているが、遺跡の最盛期を迎えるのは中期末であり、後期にも発展しながら以後急激に衰退する。又、遺物が出土しているのみで、詳細は明らかではないが、中期の都呂須遺跡、後期の垂水南遺跡、藏人遺跡、五反島遺跡等が確認されている。特に、後期に垂水遺跡南方の平野部に出現する垂水南遺跡、藏人遺跡は、その実態は明らかではないが、古墳時代にまで継続しており、垂水遺跡との関連が指摘されている。

又、千里丘陵東方では、東奈良遺跡、目垣遺跡、耳原遺跡が、西方の猪名川流域では田能遺跡、勝部遺跡等の前期から後期に継続する大規模な集落遺跡が展開している。一方、丘陵東部には新芦屋遺跡、青葉丘遺跡が所在し、新芦屋遺跡では中期から後期にかけての、青葉丘遺跡では後期の遺物が確認されている。又、両遺跡の北西の谷奥で佐原真氏の分類による外縁付鉢式にあたる銅鐸が出土している。出土地点の東南2.5kmには近隣諸遺跡の拠点的集落である東奈良遺跡が存在しており、銅鐸鎧筒、及び鋳造関連の遺物を出土したが、出土鎧筒の大半が山田出土のものと同じ古段階に属するもので、断定はできないが、両者の強い関係が想定される。

次の、古墳時代の集落址は前代同様河川流域の沖積平野上に営まれ、吹田市域では千里丘陵から神崎川に流れ込む小河川沿いの低地上に前期の垂水南遺跡、藏人遺跡、金田遺跡が確認されている。垂水南遺跡では通算37次にわたる調査において、古墳時代の遺構としては住居址、大小の土坑、井戸、水田にともなう矢板列、木組・樋といった施設を伴なう溝等が検出されている。出土遺物としては、吉備・山陰・北陸・東海地方等、各地から搬入された大量の土師器が出土しており、広範な交流が考えられ、その立地からも注目される遺跡である。垂水南遺跡西方の藏人遺跡でも古墳時代の遺構として河道跡等を検出している。遺跡の盛行する時期は藏人遺跡の方が若干早いようであるが、廃絶の時期は同様に6世紀前半で、垂水南遺跡では古墳時代遺構全面を覆うように、砂層の堆積が認められ、大規模な洪水が集落の廃絶の一因と考えられている。又、昭和61年に調査された五反島遺跡は神崎川の河川敷に立地しており、河道跡を検出するとともに、韓式系土器を含めて、多量の布留式期の土器を検出している。

丘陵西方の豊中市域では猪名川流域の沖積平野上に庄内遺跡、穂積遺跡、利倉遺跡、利倉西遺跡、小曾根遺跡、島田遺跡、北条遺跡が、丘陵東方の茨木市域では東奈良遺跡等が確認されているが前代に比べて、小規模化の傾向が認められる。

又、丘陵東南の吹田・摂津市境周辺の沖積平野には明和池遺跡等のように古墳時代後期前半の遺物を出土する地点があり、実態は明らかではないが、集落の存在が想定される。

一方、古墳については千里丘陵周辺では、前期後半には猪名川流域に面する丘陵の縁辺部に御神山古墳、新免上佃古墳、待兼山古墳、池田茶臼山古墳等が出現する。吹田市域では、堅穴

式石室材、及び石棺材が確認されたのみで実態は明らかでないが、垂水西原古墳が前期古墳と考えられ、南方の低地上に所在する垂水南遺跡、藏人遺跡等の集落との関連が考えられる。

前期末ないしは中期前半には千里丘陵西端の豊中市桜塚地区に前方後円墳である大石塚古墳、小石塚古墳、御鶴子塚古墳、円墳の大塚古墳が古墳群を形成している。吹田市域では中期古墳は認められず、垂水南遺跡、藏人遺跡の両遺跡が5世紀代に大きく発展するのに対して、それに対応する古墳は認められない。前・中期を通して豊中市域の丘陵西方が一帯の中心地域であったと考えられる。

後期になると、千里丘陵西方では群集墳として豊中市太鼓塚古墳群が認められる。一方、東方の吹田市域では、出口古墳、円塚古墳、吉志部1~3号墳、松下保健センター古墳、新芦屋古墳、感神宮所在古墳、及び陶棺墓の存在が確認されており、明確な群集墳としてのまとまりを示すものはないが、前・中期の稀少性に比べると、その存在は注目されよう。

このように、群集墳としての大きなまとまりが認められない千里丘陵一帯の後期古墳の展開は、西摂、及び三島地域に比べると、大きな相異をみせているが、これは、須恵器窯跡群の存在と深く関わってくるものと思われる。

昭和60年度に調査され、最古段階の窯の一つであることが判明したS T32号須恵器窯跡を除くと、千里丘陵では5世紀末には丘陵北西の豊中市域で生産が開始され、6世紀前半には丘陵東南の吹田市域でも生産を開始する。豊中市域では6世紀前半に、吹田市域では6世紀後半に生産の主体を置き、6世紀中葉を境にして、生産の主体が移動したと考えられるが、共に7世紀前半で急速に衰退し、中葉には、その活動をほぼ終了している。

吹田市域では、丘陵縁辺部で生産が開始され、次第に丘陵深部へと生産の場を移動していくが、現在、7支群52個所が確認されており、豊中市域を含めると現時点での千里古窯跡群の操業は100~120基程度と想定される。従って、千里古窯跡群では1世紀半という短期間に100基以上の窯の操業を行っており、このように高い生産密度と規模を持った窯跡群は他には泉北丘陵の陶邑古窯跡群以外には知られていない。

これらの窯跡群に対応する6世紀代の集落址は吹田市域では確認されておらず、又、技術者集団に明確に関連すると考えられる古墳群も知られていない。しかし、希薄な後期古墳において、注目されるのが、先述した市内6箇所で確認されている陶棺の出土であり、丘陵縁辺部における分布のありかた、及び出土した陶棺の特徴から、窯跡群の展開と密接に関連するものと判断される。

須恵器生産は7世紀前半には急速に衰退に向かうが、奈良時代になると、丘陵東南部において、聖武朝難波宮の造宮瓦窯跡である七尾瓦窯跡が操業を開始する。これは当地一帯における良質な原料土の存在といった地質的条件や、古墳時代後期の須恵器生産以来の技術的条件が、当地が窯業地帯として再登場する際の一つの大きな要因となったものと判断され、七尾瓦窯跡廃窯後、約60年を経て平安宮造宮瓦窯跡である吉志部瓦窯跡開窯時においても、重要な要因になったと判断される。このように、吉志部瓦窯跡一帯は難波宮、及び平安宮という国家による

大規模な造営事業に伴う官営工房が同一の地に営まれるという、他の窯業遺跡に対してきわめて特色のある地域であり、当該地の古代史像を考える上で重要な問題を示唆しているといえる。

官瓦窯以外には、白頭瓦窯跡（奈良時代前期）や、瓦窯跡と推定される江坂町、及び新芦屋古瓦散布地（奈良時代前期、平安時代）が確認されているが、白頭瓦窯跡から茨木市穂積庵寺に供給されたことが判明した以外は、実態は明らかではない。

瓦窯跡以外では寺院址として豊中市新免庵寺が知られており、吹田市域では明確な寺院址は確認されていないが垂水南遺跡において奈良時代前期の瓦の出土が認められ、寺院址の存在が想定される。垂水南遺跡では、第5次調査において、河道内から平安時代初頭の土器がまとまって出土したが、その中に「垂庄」・「中庄」といった墨書の認められるものがあり、東寺領垂水庄立莊期に関連する遺物として注目される。

五反島遺跡では平安時代初頭から末にかけての遺物の出土量が増加するとともに、中国鏡、儀仗用鉄鎌、馬具等、質的にも優れたものが多く、宮廷祭祀との関連が考えられる。

又、吉志部瓦窯跡の史跡指定に伴う公園整備時に確認された吉志部火葬墓は奈良時代末～平安時代初頭と考えられる須恵器藏骨壺が出土しており、千里丘陵における古代火葬墓として周辺では希有な例であり、さらには、七尾瓦窯跡窯窓から吉志部瓦窯跡開窯にかけての期間の紫金山丘陵の状況を考える上で注目される資料である。

千里丘陵南方の沖積平野は地理的には北摂と西摂平野の境にあたり、交通の要地として重要な位置を占めたが、平安時代から寺社、権勢門家等の荘園が成立しており、豊中市小曾根遺跡、穂積遺跡、吹田市藏人遺跡、都呂須遺跡、操車場遺跡等の中世集落址が確認されている。

平野部南東の吹田市から茨木市にかけては鴨下郡条里が、南方の吹田市から豊中市にかけては豊嶋郡条里が施行されており、文献、及び歴史地理学的な研究が加えられてきた。特に、豊嶋郡条里については史料も整っており、その施行は史料上は平安時代初めにまで遡るが、考古学上からは吹田市や豊中市において、発掘調査では条里の規制を受けた水田構造は鎌倉時代のものが最も古く、郡条里の東限界においても、整備された水路を検出したが、鎌倉時代のものである。従って、施行時期については、考古学的には現段階では明らかにできず、中世を遡る資料は認められないが、これは、当地一帯における、丘陵から流下する小河川の流域の固定化による、広域な安定化に関わるものと考えられる。

第4章 調査の成果

a 調査の経過

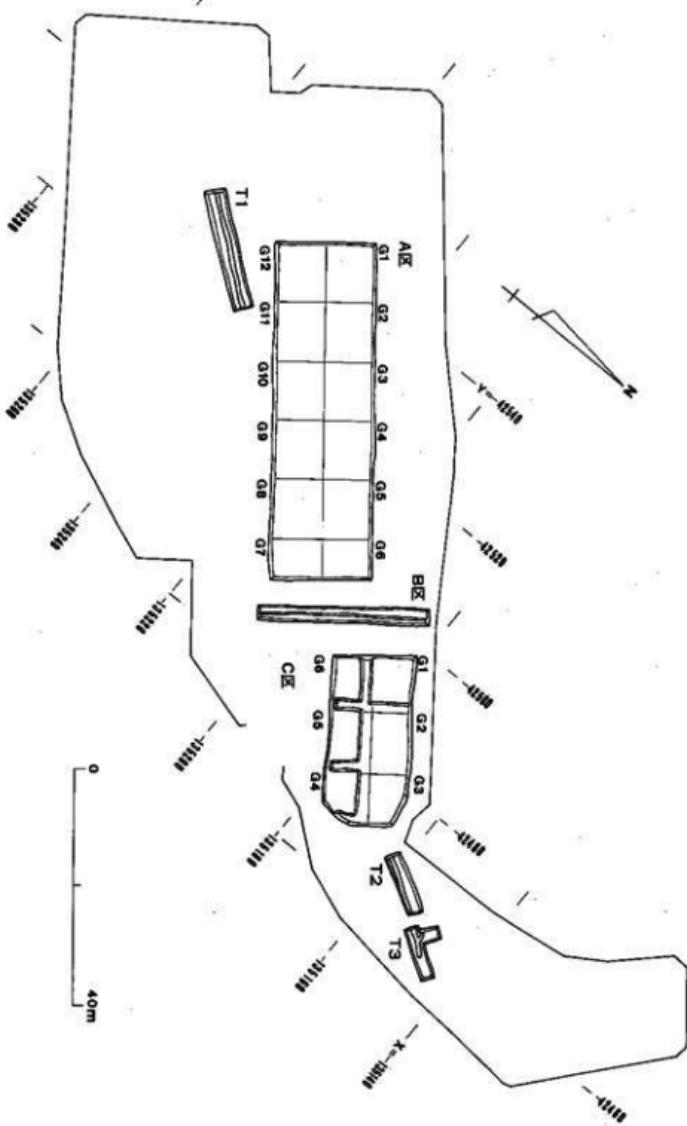
今回の発掘調査では、試掘調査の結果を受けて瓦窯跡に最も近接する住棟2棟、及び住棟間の道路敷部分の3箇所に計1421m²の調査区を設定した。住棟部分の調査区をA・C区、道路部分をB区とし、各々の調査面積はA区969m²、B区60m²、C区392m²を測る。A区は12区に、C区は6区に分割し、各々、北西より右回りに順次G1～G12（A区）、G1～G6（C区）とした。又、第2次面で検出した溝S D01については、当初の調査区外に伸びるために、溝の延長線上で住棟・道路敷にかかる部分に、3箇所のトレンチ（T1～T3）を設定し、計57m²を調査した。

発掘調査は昭和62年1月14日から準備作業に入り、21日からA区の表土層を重機を使用して掘削を開始し、順次B、C区と調査を進めていった。表土層掘削後、現地表下0.4～0.5mで検出された中世遺物包含層である灰色粘質土、及び黄褐色粘質土層（第II層）以下について分層発掘を進めた結果、3時期の造構面、及び自然面を確認した。第II層上面において、A区で土



第11図 発掘調査地点周辺図 (S = 1:5000)

第12图 测查区平面图



坑4基(S K16~19)を検出し(第1次面)、第IV層上面において、全調査区で平安時代、吉志部瓦窯操業期の遺構面を検出した(第2次面)。A区で大型の土坑15基(S K01~15)を、A~C区、及びT 1~T 3において延長135mにわたって溝1条(S D01)を検出した。

これらの土坑群は、その掘削状況や瓦窯跡との位置関係から、瓦製作に伴なう粘土の採掘坑の可能性が高いと判断された。溝S D01についても、明確に時期や性格を示すような遺物は出土していないが、溝の走行方位と土坑群の展開方位がほぼ一致することから、土坑群に関係する可能性が高いと考えられる。遺構の精査後、航空測量を実施するとともに2月28日に現地説明会を開催し、市民に調査の状況を説明した。

その後、さらに下層の調査を進めたが第V層以下の堆積層については、明確な遺構・遺物は検出されず、現地表下1.4~1.9mで白灰色粘土層の地山層を確認した。地山面は緩やかな凹凸を繰り返す、浅い谷状地形をなしており、特にA区で径0.3~1.1mの樹木の株跡ないしは、風倒木の痕跡等と考えられる小穴が密集して検出された(第3次面)。第3次面の航空測量後、3月31日現地における全ての調査を終了した。

内業調査については、昭和62年度事業として、昭和62年6月1日から10月31日まで、吹田市青山台2丁目5番地、青山台小学校内の社会教育課文化財分室において実施した。

b. 土 層 序

調査地の現地表面はほぼ平坦面をなすが、西に向かって緩やかに高くなっている、標高16.40m~16.60mを測る。各調査区の土層序は、ほぼ同一の様相を示し、遺構内の堆積土を除くと、基本的には以下のとおりに大別される。

第I層(A区1~4、B区1~2、C区1~2)

表土層以下、現地表下20~30cmまでの砂質土のほぼ平準な堆積を主とする堆積層である。近時の堆積層であり、近代以降の耕作面、及び府営住宅建設時の造成面である。

第II層(A区5、B区3、C区3)

A区では標高16.00~16.30m・B、C区では16.40mで確認される平準な堆積層である。

A区では大半が層厚10~20cmの灰色粘質土が占めるが、A区西端付近、及びB・C区では層厚10~15cmの黄色粘質土となる中世遺物の包含層である。上面では土坑SK16~19以外には明確な遺構は確認されていないが、広範にはほぼ平坦な面をなしており、中世の耕作面(第1次面)と判断される。層中からはA・B・Cの各区から弥生時代の石器、弥生土器、古墳時代土器・須恵器、奈良時代瓦・須恵器、平安時代瓦・須恵器・土器・鎌倉時代瓦器・土器・陶磁器等が出土している。出土遺物の大半は細片であり、器表面の磨滅しているものが多い。又、調査地の南、及び東方ほど出土量は減少する。本調査出土遺物の大半は、この第II層からのものである。

第III層(A区7、B区・C区4)

A区では標高15.85~16.20m、B・C区では16.20mで確認された、層厚5~10cmを測る黄色

粘土層であり、比較的平準な堆積層である。下層の第IV層（黄色粘土層）とほぼ同一の層序であるが、第IV層中には遺物を全く含まず、第III層は遺物を包含すること、及び砂質土等を多く含むこと等によって分層され、黄色粘土上層とした。上面には遺構は認められず、層中からは奈良時代瓦・須恵器、平安時代瓦・須恵器が若干出土している。又、細片であるが鎌倉時代に下る可能性のある須恵器（壺体部）も出土している。第III層は基本的には遺構形成層である第IV層と同一層序であり、北側の高位部分が削られて流れ込んだものである。吉志部瓦窯閉廃後、中世にかけて削平、堆積した層序と判断される。

第IV層（A区7、B・C区5）

A区では標高15.80～16.10m、B区では16.10m、C区では16.20mで確認される、層厚15～30cmを測る、黄色粘土層である。平準な堆積を示し、均質な粘土層であるが、部分的に粗砂を含む。上面からは、平安時代（瓦窯操業期）の瓦を主として出土することから、吉志部瓦窯操業期の遺構面（第2次面）と判断される。この黄色粘土層を掘り込んで、A区北西端で大型土坑群（SK01～15）と、溝SD01をA～C区、及びトレンチ調査部分で延長135mにわたって検出した。遺物の出土は、黄色粘土層上面、及び土坑内埋土から弥生時代の石鏃、奈良時代の瓦・須恵器、平安時代の瓦・須恵器が出土しているが、細片で器表面が摩滅しているものが多い。又、SD01については出土遺物は堆積土上層から繩文時代の石鏃、平安時代と考えられる、土師器の微細片が出土しているのみで、明確に時期を断定できる遺物は出土していない。

第V層（A区8～35、B区6～27、C区6～30）

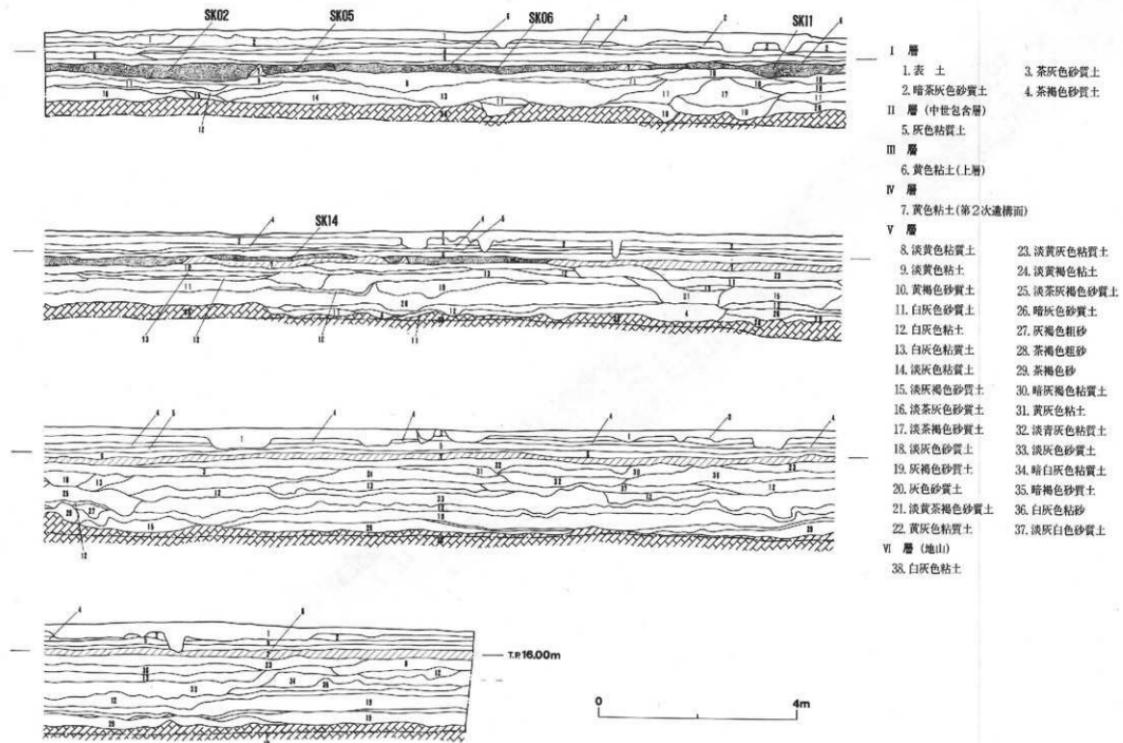
第IV層の黄色粘土層より下層では、北から南へ流れ込むように粘土層と砂質土層の複雑な堆積があり、明確に堆積時期の特定はできず、地山層までの堆積層を一括して第V層とする。粘土層、砂質土層の大半は洪積層の二次堆積層と考えられ、調査地点が洪積丘陵縁辺の、南方の沖積平野に向かって緩やかに傾斜する微高地であることから、丘陵からの出水と土砂の流入等によって開析、及び堆積作用を繰り返した結果と判断される。

第VI層（A区36・B区28・C区31）

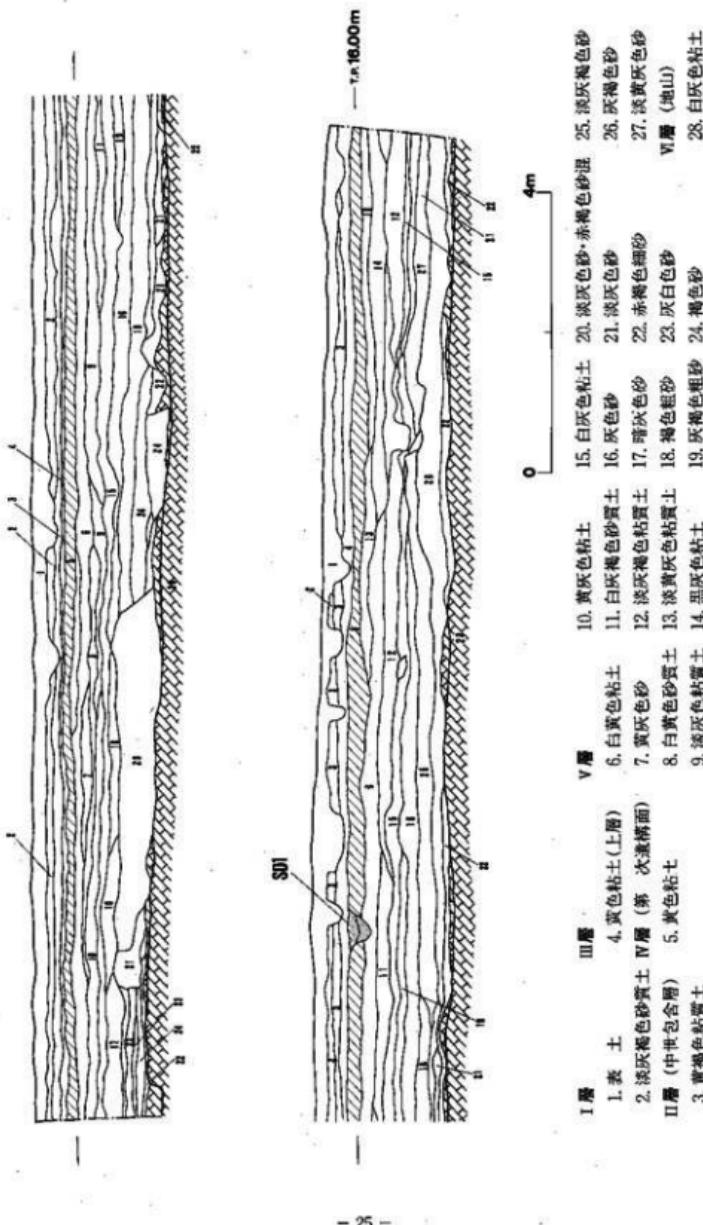
地山層である白灰色粘土層で、A区では西から東へ向かって緩やかに傾斜し、調査区中央付近で、さらに大きく落ち込み、西へ下る。しかし、調査区東端でやや高くなっていき、B区からC区にかけて凹凸を繰り返しながら、全体には北から南に向かって緩やかに傾斜する浅い谷状地形をなす。洪積丘陵からの雨水等の出水による開析作用の結果と考えられる。地山面上には、特にA区西半部において、径0.3～1.1mの樹木の株跡ないしは風倒木等の痕跡と考えられる、小穴が密集して検出された（第3次面）。

第IV・V・VI層からは遺物の出土は認められず、堆積時期については明らかではない。

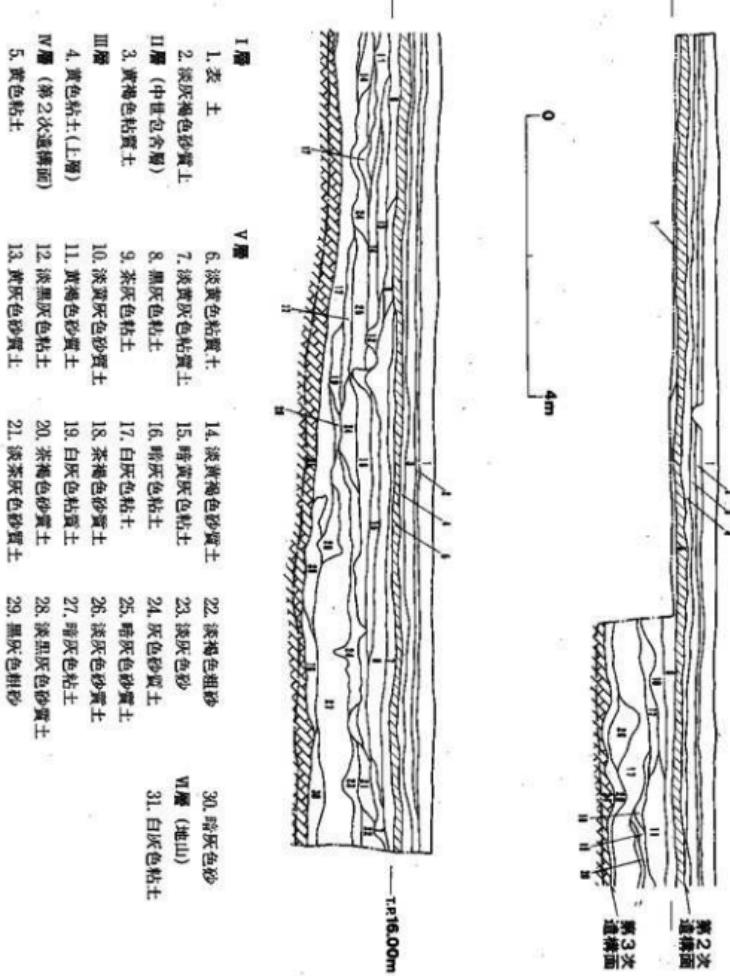
調査区内の土層の形成過程を見ると、瓦窯操業期以前について、洪積丘陵からの強い影響を受ける地域で、開析、及び堆積作用を繰り返す、非常に不安定な地域であったと考えられる。吉志部瓦窯操業期の遺構面である第IV層、黄色粘土層は調査区全域に認められ、ほぼ平準な堆積を示しており、この第IV層堆積時には当地一帯が安定した様相を示している。



第13図 A区北壁土層断面図



第14图 B区东壁土层断面图



第15圖 C区北壁土層断面図

瓦窯閉塗後、第III層以後は、中世から現代にかけて、安定した堆積状況を示し、府営岸辺住宅建設までは耕作地であったと考えられる。

このように土層序の形成は第IV層を境として大きな変化を示し、吉志部瓦窯操業が当地一帯の開発にあたっての大きな画期になったものと判断される。

c. 遺構

今回の調査で検出した遺構は、第II層において、A区で土坑4基を(第1次面)、第IV層において、土坑15基と溝1条を(第2次面)、第VI層において、樹木ないしは風倒木の痕跡等と考えられる小穴群を検出した(第3次面)。

(1) 第1次面(第14図)

第II層をベース面とする遺構面であり、標高16.00~16.40mを前後する。調査区全域に均質な粘土層が、広範囲な平坦面をなすことから、明瞭な耕作痕等は認められなかったが、中世の耕作面の可能性が高いと判断され、遺構としてはA区中央より、やや東方で土坑4基、SK16~19を検出した。

SK16

平面は長方形をなし、東西1.48m、南北42cm、深さ18cmを測る。底部は比較的平らに近い。堆積土の暗灰色粘質土層中からは、奈良、及び平安時代の瓦の細片が微量出土している。

SK17

平面は長方形をなし、東西1.1m、南北90cm、深さ20cmを測り、底部は平らである。土坑内には、淡灰色砂質土・茶褐色粘質土・灰色砂質土の堆積が認められるが、最上層の淡灰色砂質土から平安時代後期の須恵器、壺口縁部の細片が出土している。

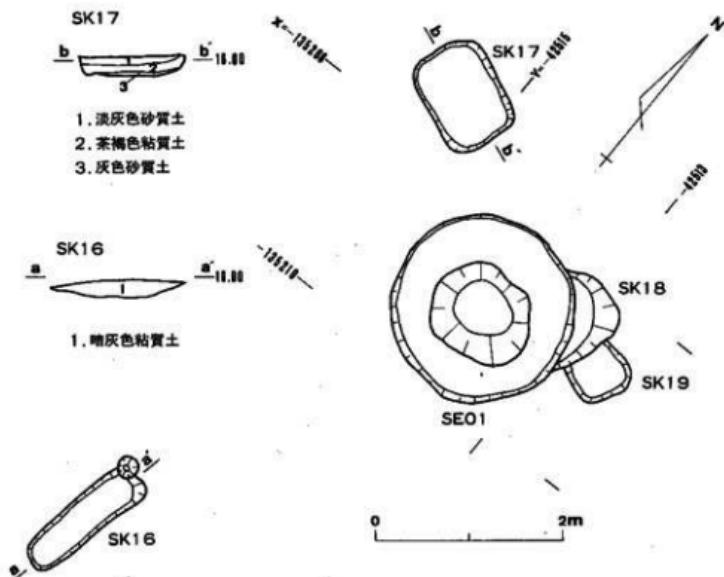
SK18

現代の井戸SE01が重複していることから、本来の規模は分からぬが、平面形は梢円形をなし、現存幅1m、深さ52cmを測る。堆積土は灰色粘質土であり、遺物の出土は認められなかつた。

SK19

SK18と重複しており、平面形は長方形をなし南北55cm、深さ30cmを測る。堆積土は灰色粘質土1層であり、出土遺物は認められない。

SK16・17の出土遺物については、原位置を保つものではなく、後世の流れ込みによるものと判断された。土坑の展開状況には規則制は認められず、これらの土坑の性格、時期等につい



第16図 A区第1次造構面実測図

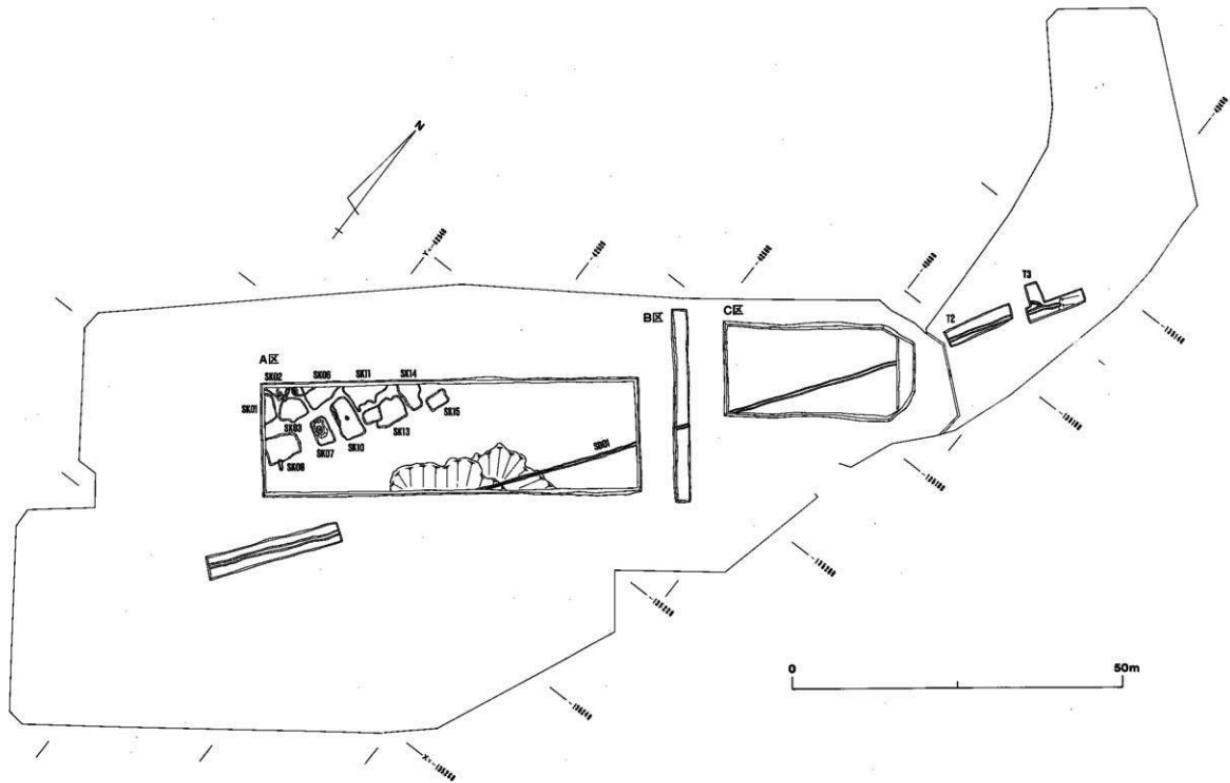
ては明らかではないが、第II層中から鎌倉時代の瓦器片が出土していることから、中世以降のものと判断される。

(2) 第2次面

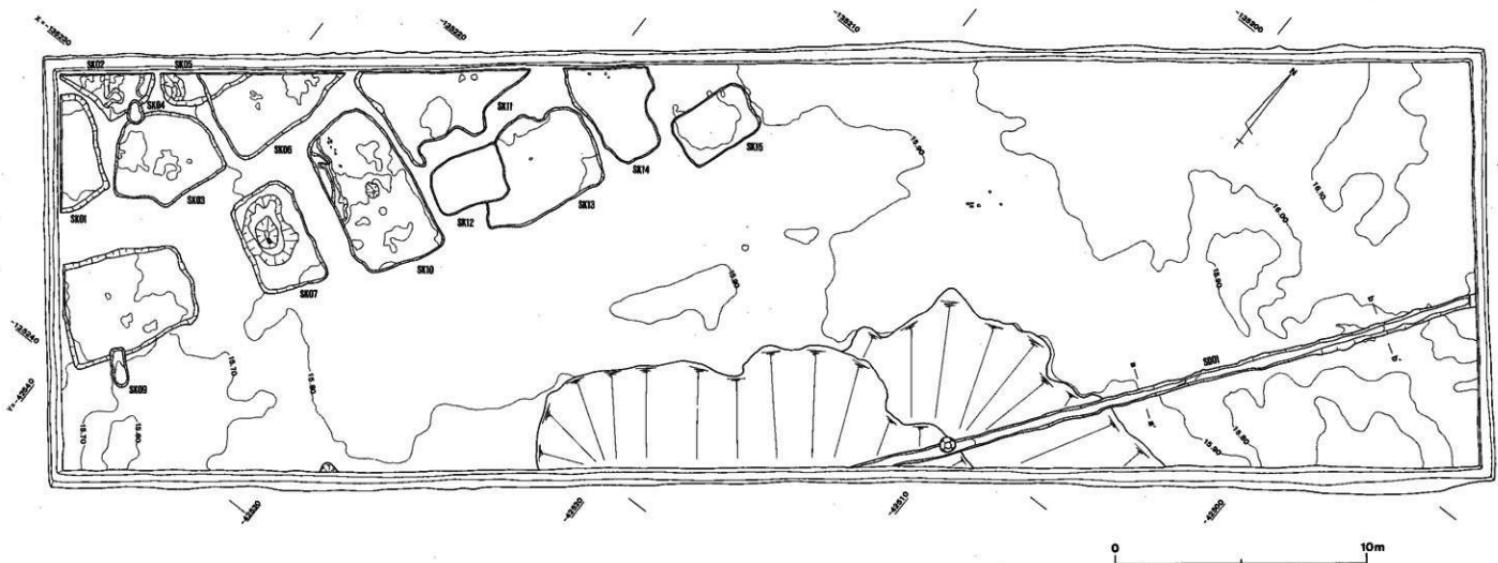
第IV層をベース面とする造構面であり、標高15.80～16.20mを前後する。造構面の形成時期については、造構等からの遺物の出土状況から、平安時代、吉志部瓦窯操業期に一致するものと判断される。調査区全域に同一の土層序が展開しており、A区とC区では10～40cmの若干の比高差は認められるが、広範囲にわたって平坦面が認められる。造構としては、A区西半部で土坑15基が密集して検出されるとともに、A区～C区、及びT1～T3において、北東から南西に走行する溝S01を、延長135mにわたって検出された。

SK01

南西側が調査区外に拡がるために、全体の規模、及び形態は明らかではないが、平面はほぼ長方形に近いものと考えられ、検出部分で、長さ4.2m、幅2.25m、深さ21～27cmを測り、底面は平らである。土坑内の堆積土は1層で、灰色粘質土と黄色粘土が塊状に混じりあった層であ



第17図 第2次構造平面図



第18図 A区第2次遺構面平面図

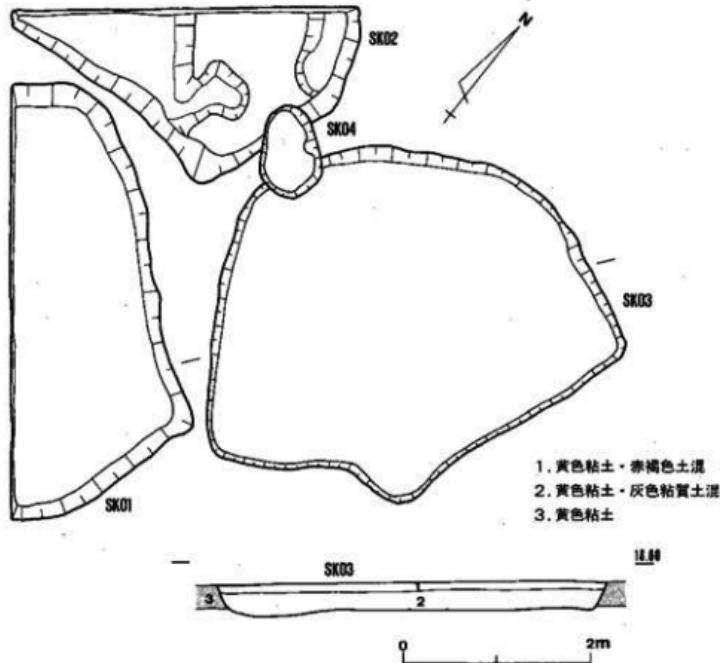
り、層中から古墳時代須恵器甕・提瓶、奈良時代瓦、平安時代瓦、土師器杯等の細片が若干出土している。

SK02

北側部分が調査区外に拡がり、東側の一部にSK04が重複している。平面は不整形であるが、長方形に近いと考えられる。検出部分で南北2.5m、東西2.8m、深さ21~35cmを測り、底面は弱い起伏が認められる。土坑内堆積土は1層で、灰色粘質土・黄色粘土・赤褐色土が塊状に混じりあった層であり、層中から古墳時代須恵器杯・甕・壺、奈良時代瓦、平安時代瓦、土師器杯等の細片が若干出土している。

SK03

西側の一部にSK04が重複している。平面は不整形であり、東西3.6m、南北4.1m、深さ30



第19図 SK01・SK02・SK03・SK04実測図

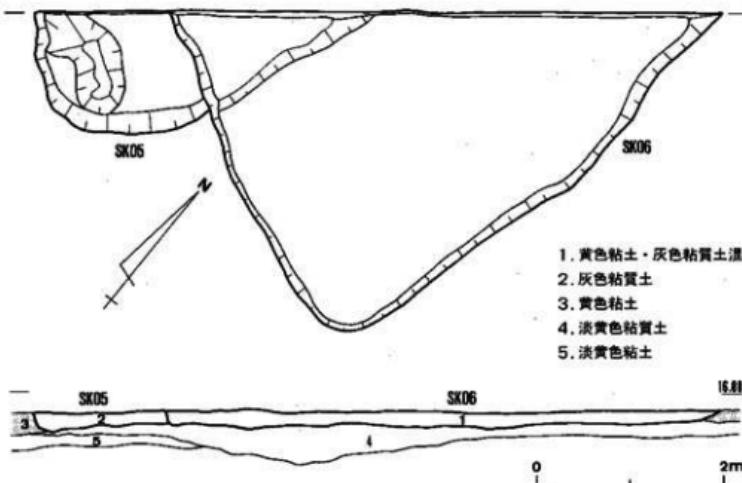
cmを測り、開口部での面積は12.54m²を測る。底面は平らである。土坑内堆積土は1層であり、赤褐色土と灰色粘質土が塊状に混じりあった層であり、層中から弥生土器・古墳時代須恵器杯・壺・壺、奈良時代瓦、平安時代瓦、土師器杯・碗、須恵器壺等の細片が若干出土している。

S K04

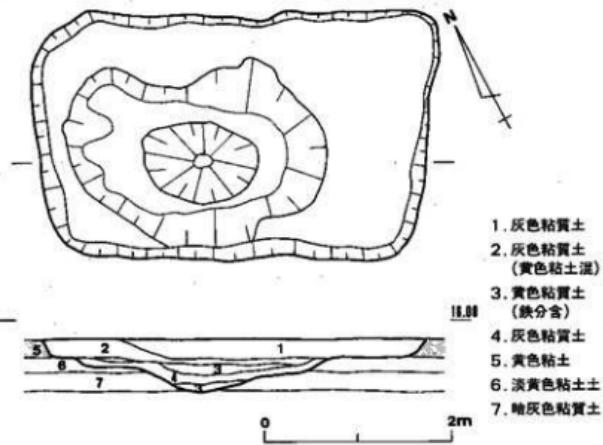
S K02、及びS K03と重複しており、平面は橢円形をなす。長径1m、短径60cm、深さ8cmを測り、底面は平らである。土坑内堆積土は1層で、灰色粘質土と黄色粘質土が塊状に混じりあった層であり、遺物の出土は認められない。

S K05

北側部分は調査区外に拡がるとともに、S K06が重複している。検出部分で、東西2m、南北2.4m、深さ7~10cmを測る。底面は南側が若干掘りくぼめられているが、ほぼ平らである。土坑内の堆積土は灰色粘質土であり、層中から古墳時代須恵器杯・壺等の細片が出土している。



第20図 SK05・SK06実測図



SK06

北側部分は調査区外に拡がるが、平面は長方形と考えられる。検出部分で、東西4m、南北5m、深さ7~15cmを測り、底面は平らである。土坑内の堆積土は1層であり、黄色粘土と灰色粘質土が塊状に混じりあった層であり、層中から古墳時代須恵器、奈良時代瓦、平安時代土師器杯、須恵器壺・壺等の細片が、若干出土している。

SK07

平面は、ほぼ長方形であり、長辺4.3m、短辺2.7mを測り、底面は中央部から西側にかけてが深く掘りこまれており、深さ58cmを測る。面積（開口部）は11.3m²を測る。土坑内堆積土は、灰色粘質土、及び黄色粘土の堆積が認められ、層中からは古墳時代土師器壺、奈良時代瓦、平安時代瓦、土師器杯、須恵器杯等の細片が若干出土している。

SK08

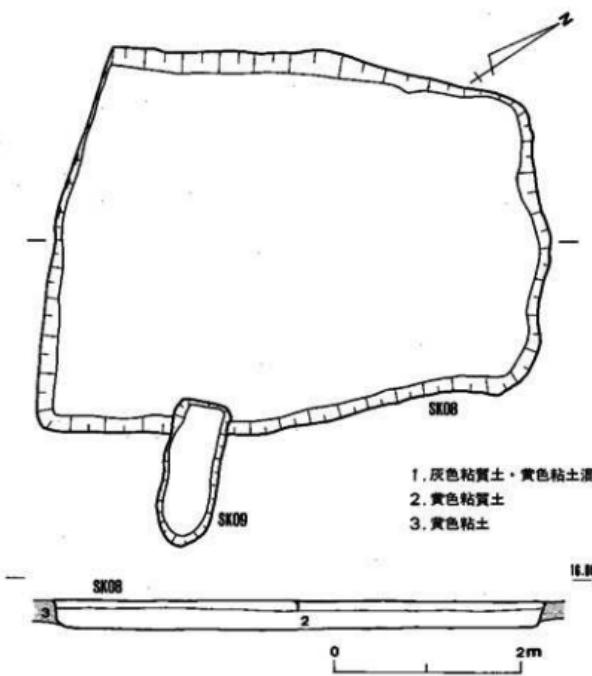
平面はほぼ長方形をなし、西南隅は調査区外に拡がり、東側の1部にSK09が重複する。長辺5.4m、短辺4.1m、深さ27cmを測り、面積（開口部）20.6m²を測る。底面は平らである。土坑内堆積土は灰色粘質土と黄色粘土が塊状に混じった層と黄色粘質土の2層が認められるが、平準な堆積を示し、両層から古墳時代須恵器杯・壺・壺、土師器壺、奈良時代瓦、平安時代須恵器壺等の細片が若干出土している。

SK08

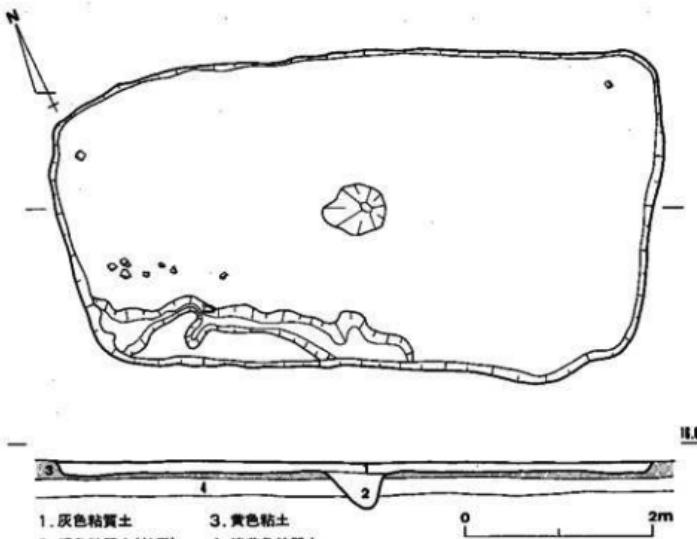
平面はほぼ長方形をなし、長辺1.6m、短辺60cm、深さ5~9cmを測る。底面は平らである。土坑内の堆積土は灰色粘質土、1層であり、遺物の出土は認められない。

SK10

平面は長方形をなし、長辺6.5m、短辺3.5m、深さ16cmを測り、面積(開口部)21.05m²を測る。底面は全体に平らであるが、西南隅に幅20~60cm、深さ6cmを測る、浅い溝状の落ち込みと、土坑中央部には、不整円形で径50~68cm、深さ40cmを測るビットが認められる。中央部のビットについては、その掘削状況から、人為的に掘りこまれたものと判断される。土坑内の堆積土は灰色粘質土であり、層中から弥生土器、古墳時代須恵器杯、奈良時代瓦、平安時代瓦、土師器、須恵器甕・壺等の細片が若干出土している。



第22図 SK08・SK09実測図



第23図 S K10実測図

S K11

北側部分は調査区外に拡がり、土坑東側部分も突出する部分があり、やや不整形であるが、平面は長方形に近い。検出部分で長辺5.9m、短辺4~4.6m、深さ8~26cmを測る。土坑内堆積土は灰色粘質土であり、層中から、古墳時代土師器壺、奈良時代瓦、須恵器杯、平安時代瓦、須恵器杯等の細片が若干出土している。

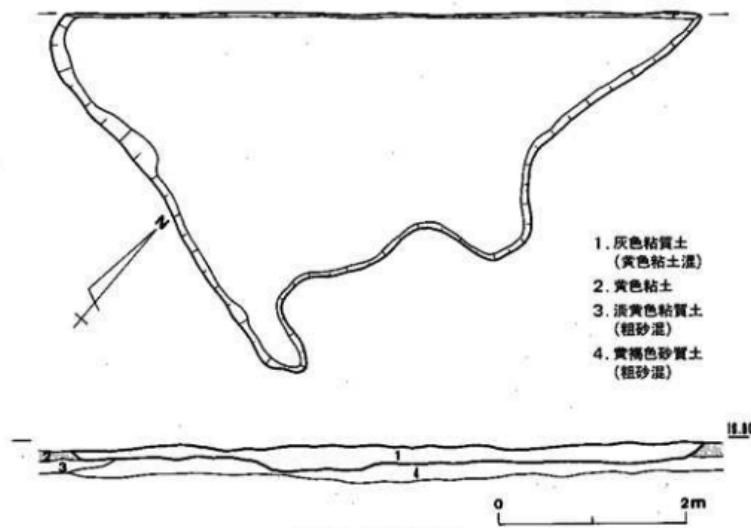
S K12

平面は長方形をなし、長辺3m、短辺2.4m、深さ4cmを測り、面積(開口部)6.48m²を測る。底面は平らである。土坑内堆積土は灰色粘質土であり、奈良時代瓦、平安時代瓦、須恵器杯等の細片が若干出土している。

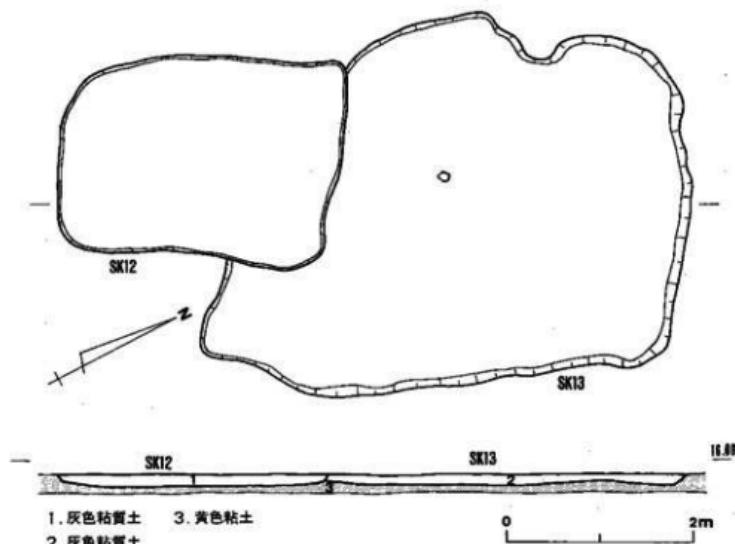
S K13

西南隅をS K12が重複しているが、平面は長方形に近く、長辺5m、短辺4m、深さ7cmを測り、面積(開口部)17.18m²を測る。

底面は弱い起伏が認められる。土坑内堆積土は灰色粘質土であり、古墳時代須恵器器台、奈良時代瓦、平安時代瓦、須恵器壺・杯・壺、土師器皿等の細片が若干出土している。



第24図 SK11実測図



第25図 SK12・SK13実測図

SK14

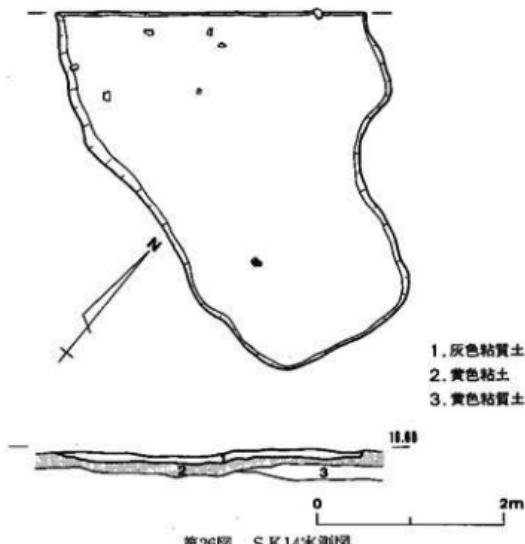
平面は不整形で、検出部分では、東西4.5m、南北3m、深さ8~10cmを測る。土坑内の堆積土は灰色粘質土であり、層中から古墳時代須恵器杯、奈良時代瓦、平安時代瓦、須恵器杯・壺、土師器皿等の細片が若干出土している。

SK15

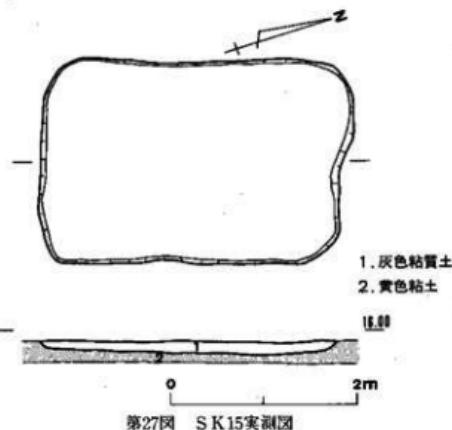
平面は長方形をなし長辺3.2m、短辺2.2m、深さ6cmを測り、面積（開口部）7.4m²を測る。底面は平らである。土坑内の堆積土は灰色粘質土、1層であり、層中から古墳時代須恵器壺、奈良時代瓦、平安時代瓦、須恵器等の細片が若干出土している。

以上のように、検出した15基の土坑は、平面は大半が長方形に近く、展開方位も、旧地形の影響を受けたものと考えられるが、N-33°-E前後で、ほぼ一致しており、さらに、土坑群の東南端も直線状に並ぶ等、きわめて規則的な展開を示している。各土坑は、その間隔が10~30cmと密集した状況を示すが、SK08の北、及び西側については、他の土坑との間隔が2mと比較的広い空間が認められる。

土坑の底面は、ほぼ平らで、その掘削は黄色粘土層（第IV層）で止どめられているが、SK



第26図 SK14実測図



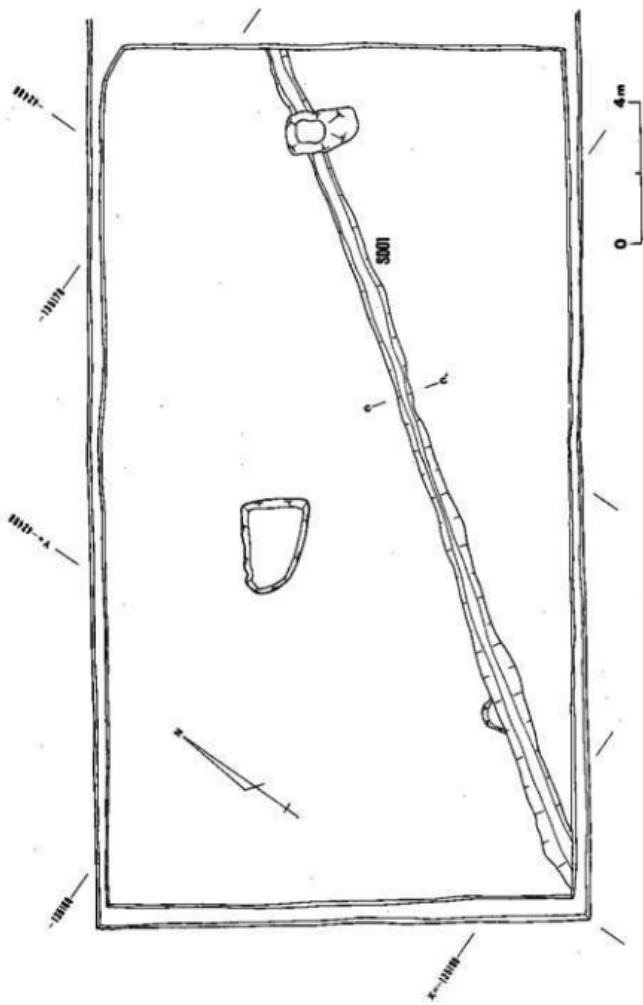
第27図 SK 15実測図

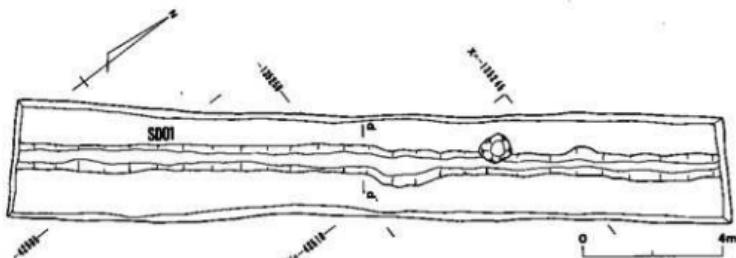
07は、さらに下層の淡黄色粘質土、暗灰色粘質土まで掘りこまれている。又、SK 10は中心部分を径50~69cm、不整円形に淡黄色粘質土まで掘りこまれている。遺物の出土は概して少なく、弥生時代から平安時代にかけての遺物の細片が出土しているのみであり、時期的にも幅があることから、これらは、いずれも、一括して投棄されたといった状況を示すものではなく、土坑内の堆積土が一時期に埋った状況を示していることから、その際に流れ込んだものと判断される。以上の点から考えると、土坑の性格については、土坑それ自体が意味を持つのではなく、掘削自体、すなわち、黄色粘土層の掘削が目的であると考えられる。

S D 01

幅40~80cm、深さ10~40cmを測り、ほぼ直線状にN-43°-Eに方位をとり、溝底のレベルから、北東から南西に向かって流下したものと判断される。A・B・Cの各調査区、及びトレチ調査部分で延長135mにわたって検出されたが、南北側については、調査区外に伸びていくようであり、北東側についても、擾乱坑が重複しており、溝は切られているが、やはり、調査区外へ伸びていくものと判断される。又、検出部分の北東端にあたるT 3においては、南西から東へ湾曲しながら流れ込む、幅20cm、深さ10cmの溝を検出している。溝内の堆積土は赤褐色粘質土、淡灰褐色砂質土を主とし、C区で赤褐色粘質土から石器（第35図1）と平安時代と思われる土師器の細片が微量出土している。S D 01の性格については、時期を明確に決定する遺物の出土も認められず、溝内の堆積土も土坑内堆積土とは異なることから、A区の土坑群との関連は断定できないが、展開方位が近似することから、土坑群とS D 01との間の幅13mの空間が何らかの作業空間である可能性もある。

第28圖 C區第2次地盤面平面圖





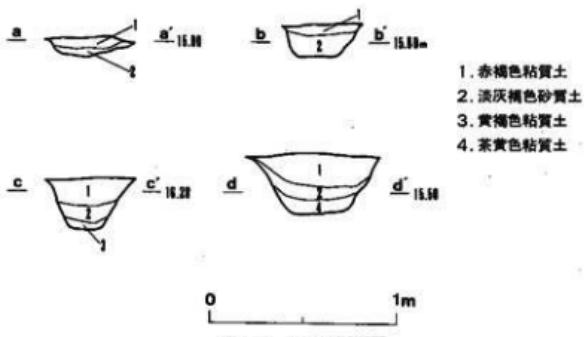
第29図 T1第2次達構面平面図

(3) 第3次面

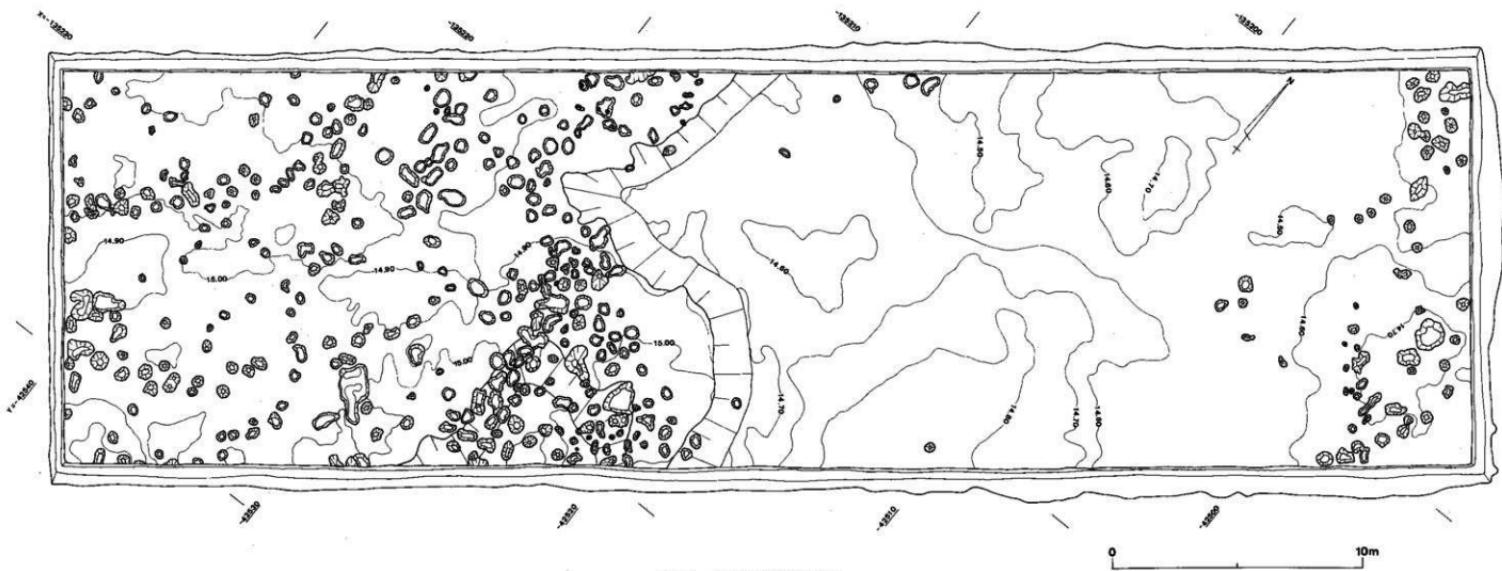
地山層である、第VI層をベース面とし、検出面は標高14.65～15.10mを測る。先述したように、地山面は起伏しながら、北から南に向かって緩やかに傾斜する浅い谷状地形をなし、A区、及びC区で密集した小穴群を検出した。検出数はA区で375基、C区で32基である。

ベース面はA区では標高14.90～15.00m前後で、西から東に向かって緩やかに傾斜していくが、調査区中央部付近で30～40cm落ち込み、そこから標高14.50～15.10mで起伏を繰り返す。B区では北から南へ緩やかに傾斜し、標高14.60～15.10mを測り、C区では標高14.90～15.10mで起伏を繰り返す。

小穴は、A区では調査区中央の落ち際より西方で密集して検出され、375基の内314基が集中しており、特に落ち際部分に集中している。落ち込みの最も低くなる部分には小穴はほとんど認められず、ベース面が再び高くなりはじめる調査区の東端部分でややまとまって検出される。ベース面の検出レベルが低いB区では小穴は認められず、検出レベルが高くなるC区では調査



第30図 S D01断面図



第31図 A区第3次造構面平面図

面積が限定されたが、比較的まとまりおり32基を検出している。

小穴はベース面でも高い部分で検出され、水道と考えられる落ち込みの底面では検出されていない。又、平面は不整円形で、径0.3~1.1m、深さ10~50cmを測るが、平面形態、規模にはバラツキがあり、重複しているものもあるが、展開の仕方にも規則性は認められない。堆積土は全小穴とも同一で、鉄分を多く含む硬質の粗砂層である。

第IV層以下、第VI層までの堆積土中からは遺物は全く出土しておらず、小穴内からも出土していない。

従って、これらの小穴については人為的なものとは考えられず、断定はできないが、樹木の株跡の可能性が高いと判断される。又、あるいは、少数例ではあるが、風倒木の痕跡を示すものもある。

d. 遺 物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナで23箱分に及び、奈良時代後期(平城期)・平安時代の瓦を主に、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土している。出土遺物の大半は、包含層(第II層)からの出土であり、遺構出土の遺物についても原位置を保つものではなく、かつ、細片で器表面が摩滅しているものが多い。また、第II層での遺物の出土は調査地の丘陵側の北西で多く、東、及び南方では減少する。

(1) 瓦 類

(a) 吉志部瓦窯操業期(平安時代)

瓦窯操業期の瓦としては平瓦が大半を占め、次いで丸瓦が多く、軒瓦、及び道具瓦は認められない。大半が中世包含である第II層からの出土であり、遺構、及び遺構面からの出土はわずかである。細片が多い。

平 瓦(第32図1・2)

1. A区第II層出土。厚さ2.4cmを測り、胎土は石英を主として、砂粒を多く含んで粗く、焼成は須恵質である。細片のため、全体の調整は明らかではないが、残存部分については、凸面は縦位の繩叩き目、凹面は布目圧痕を残し、幅1.7cm前後の模骨痕が認められる。側面は面取りしている。また、厚く、側面の調整も丁寧であることから、軒平瓦の平瓦部分の可能性もある。

2. A区第II層出土。厚さ1.8~2cmを測り、胎土は石英を主として、砂粒を多く含んでおり粗い。焼成は軟質で、遺存状況は悪い。凸面は縦位の繩叩き目、凹面は周縁以外は、布目圧痕を残し、幅1.7cm前後の模骨痕が認められる。

他は細片であるために、図示できないが、調整は同様であり、内面に残された布目も1cmあたり5~6本と比較的粗いものが多い。側面は、ヘラ削りによって面取りしている。また、

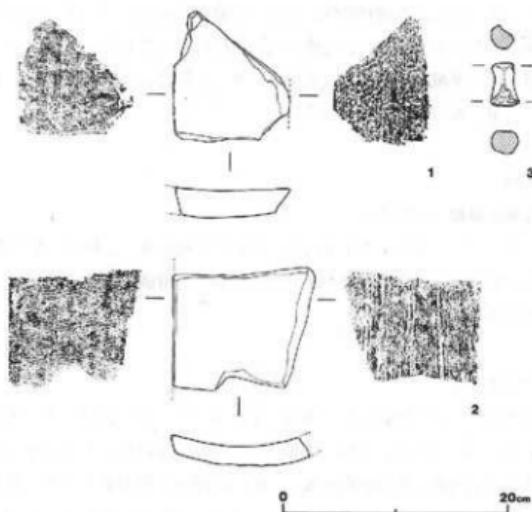
凸面の鉗叩キ目についても比較的細かいものと、粗いものがある。

九 瓦

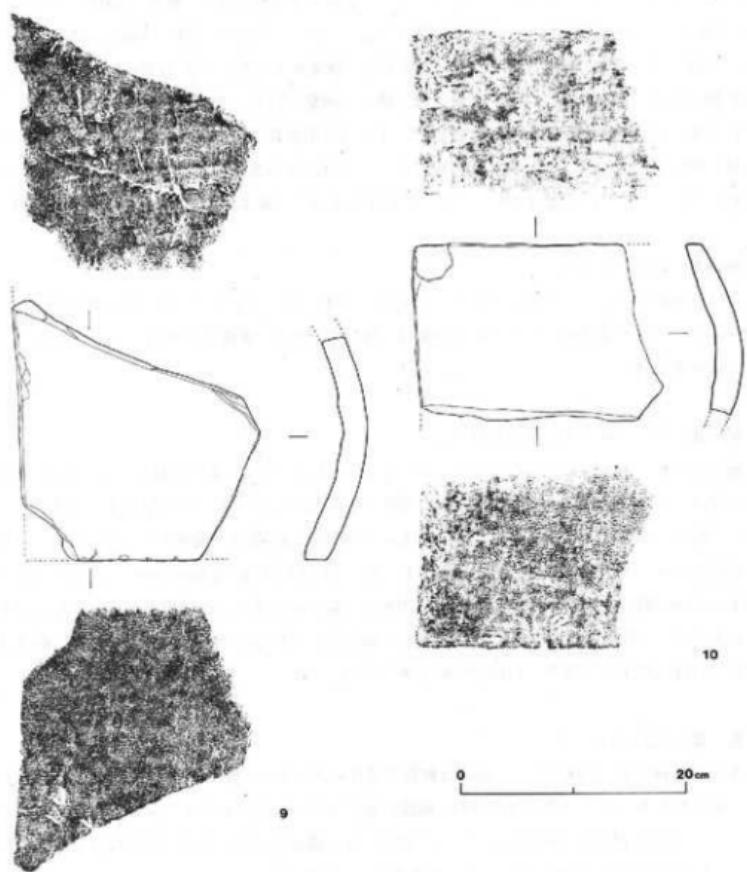
図示できるものはないが、焼成は軟質で、凸面は継位の鉗叩キ目が認められるが、丁寧に擦り消しているものが多い。凹面は布目压痕を残している。

窯道具（第32図、3）

C区、第II層出土。つづみ型をなし、長さ3.8cm、最大径2.4cm、くびれ部径1.7cmを測る。外面は媒化によって、黒色化している。



第32図 出土瓦・窯道具実測図(1)



第33図 出土瓦実測図 (2)

(b) 齋良時代後期

吉志部瓦窯の東方200mに位置する七尾瓦窯跡出土のものと同一であり、平瓦が大半を占め、次いで丸瓦が多い。他には軒平瓦、軒丸瓦が認められる。大半が第II層からの出土であり、細片が多い。

軒丸瓦（第33図4～6）

3点出土しているが、A区第II層からの出土であり、完形品ではなく、外区、内区とも確認できるものは1点のみで、他は外区の細片である。複弁蓮華紋軒丸瓦で、難波宮6303型式である。中房は凸レンズ状にふくらみ、1+6の蓮子を配している。内区は全体に隆起しており、弁端は反り返っている。外区内縁には2条の界線の間に珠文を巡らし、外縁は内傾する斜縁をなし、線鋸歯文を巡らす。瓦当外周はヘラ削り後、横ナデ調整を行なっている。胎土は精良で、黒色砂粒を多く含んでいる。焼成は6は軟質で、4・5は須恵質である。4は焼成時における外区外縁の剥落が認められ、また、丸瓦の接合については、瓦当裏面の上端より、やや下方にほぼ直角に当てている。6は瓦当裏面にヘラによるキズを付け、接合の強化を図っている。（図版17）

軒平瓦（第33図7・8）

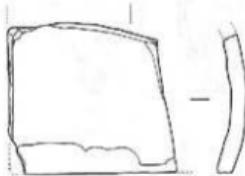
A区、第II層出土。完形品は出土しておらず、全体の8分の1程度の瓦当中央部と端部の細片である。均正唐草紋軒平瓦で、難波宮6664-B型式である。焼成は須恵質で、胎土は精良で、黒色粒を多く含む。

平瓦（第33図9・10、第34図11～13）

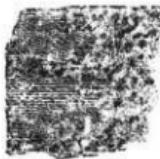
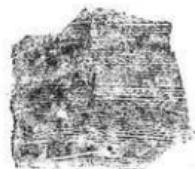
破片のみで、全体の分かるものはないが、図示したものは全て、A区第II層出土である。9・10は厚さ、2～2.2cmを測る。凸面は継位の繩叩き目が認められるが、10は端部までは達していない。凹面は周縁以外は未調整で、布目圧痕を残し、幅2.5cm前後の横骨痕が認められる。焼成は良好であり、胎土は精良で、黒色砂を含む。11～13は厚さ1.4～1.6cmを測り、凸面は1単位幅4～5cmの継位の繩叩き目が認められ、凹面は広端面から4～5cmは横方向のヘラ削り、他は継方向にヘラ削りを行なっているが、布目圧痕も残っている。焼成は須恵質であり、胎土は精良で11は石英を若干含み、12は黒色粒を多く含む。

丸瓦（第34図14）

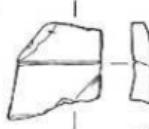
A区第II層出土。玉縁を有し、焼成は軟質で遺存状況は悪い。厚さ2.4cmを測り、胎土は精良で、黒色粒を多く含む。凸面は部分的に継位の繩叩き目が認められるが、全体に丁寧にスリ消しておらず、凹面は布目圧痕を残している。側面には半截痕が認められる。凹面には部分的に幅1.5～2cmの粘土紐の痕跡が認められ、粘土紐作りと判断される。



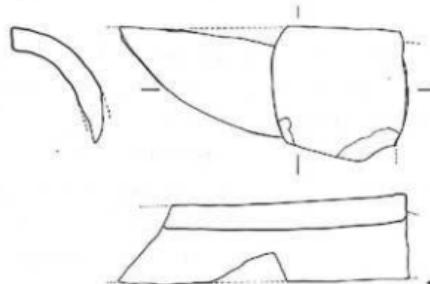
0
20cm



11

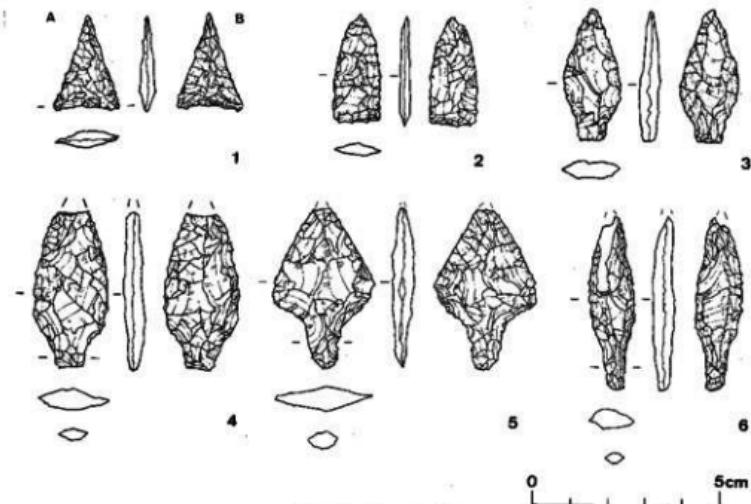


13



14

第34图 出土瓦实测图 (3)



第35図 出土石器実測図

(2) 石 器 類 (第35図)

本調査で出土した石器類は石錐のみ6点で、サヌカイト製の打製石錐である。層位的には時期を限定できないが、形態的には弥生時代のものであると思われる。遺物数が少ない割に形態や大きさがバラエティーに富み、時期的にも幅がある可能性がある。

1. C区 S D01出土。長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを測る。平面形は、ほとんど平基に近い凹基無茎式錐であり、断面は薄い凸レンズ形をなす。側縁は直線的に伸び、逆刺は鋭い。側辺の剥離はなだらかな角度で伸び、A面で左右の剥離によって中央の稜線を形成している。B面では側辺からの剥離が中央まで達せず、中央部に主剥離面を残している。
2. A区第IV層上面出土。長さ2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gを測る。平面形は弾丸のような形をした平基無茎式錐であり、断面は菱形をなす。基部も側縁と同様の剥離調整を施し、A面下部に平坦な主剥離面を残す。側縁の剥離は大きさが一定していない。
3. C区第II層出土。長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ2.6gを測る。凸基有茎式錐である。A面中央部に階段状の一次剥離面を残し、B面にも中央に主剥離面を残す。
4. T 1、S D01出土。長さ4.2cm(残存値)、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ4.65gを測る。平面形は木葉形で、断面は凸レンズ形に近い凸基有茎式の大型錐である。A・B両面とも剥離角は緩やかで、全体的に粗い剥離である。先端が欠損しており、又、基部の末端は断面となっている。

5. A区第II層出土。長さ4.3cm(残存値)、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重さ5.05gを測る。平面形はスペード形をなし、断面は菱形をなす。凸基有茎式鐵である。茎は長く、先端は細かい剝離調整が施されている。A・B両面とも中央に剝離面を残し、周辺部の調整剝離の大きさは一定ではない。上端は僅かに欠損している。
6. A区、SK03出土。長さ4.6cm(残存値)、幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ3.2gを測る。平面形、柳葉形の凸基有茎式鐵である。茎は長く幅広い剝離によって、調整されている。周辺部は急角度の剝離が施されており、中央には一次剝離面を両面に残す。A面左上に新しい剝離が入ったために上端は欠損している。特にA面ではっきりとしたフィッシャーが観察できる。

(3) 土器類

(a) 弥生時代 (第36図1)

C区第II層出土。壺口縁部であり、口縁部を下方へ垂下する。口径13.4cm(復元値)を測る。器表面の摩滅が著しいため調整は不明であるが、中期後半の資料と考えられる。

(b) 古墳時代 (第36図)

韓式系土器 (2)

A区第II層出土。鉢で口径10.2cm(復元値)を測る。口縁部は弱く外反し、端部は面をなすが、内側をわずかに屈曲させる。体部外面は縱方向の細かい叩き目を施し、他は横ナデ、ナデ調整を施す。硬質で赤黒色～赤灰色を呈する。

須恵器

杯 (3)

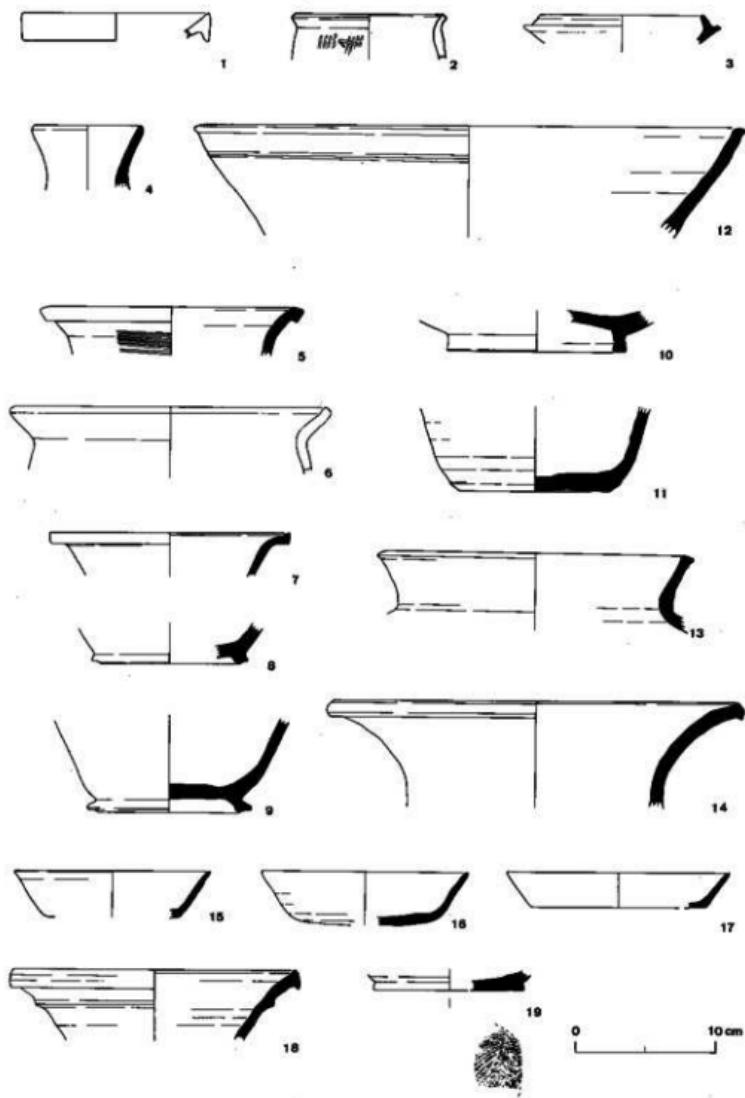
A区第II層出土。口径11.4cm、受部径14cm(復元値)を測り、口縁部は内傾して上方へ伸び、端部は丸くおさめている。残存部については回転ナデ調整を施す。中村浩氏による、陶邑編年試案のII型式5段階の資料である。

提瓶 (4)

A区、SK02出土。提瓶あるいは平瓶の口縁部であり、口径7.6cm(復元値)を測り、残存部については、回転ナデ調整を施す。頸部がそのまま口縁に達し、口唇部を表現しない。陶邑編年試案II型式5段階。

甕 (5)

A区第III層出土。口径17cm(復元値)を測る小型甕の口縁部である。口縁部は外湾気味に伸び、端部を肥厚させ、断面方形をなす。外面に細かいカキ目を施す。



第36図 出土土器実測図(1)

平安時代

須恵器が大半を占め、土師器杯・壺、綠釉陶器がわずかに認められるが、細片で、器表面も摩滅しているものが多い。大半が第II層出土であり、瓦窯操業期より下る時期の資料も多く認められ、時期的に幅が認められる。

土師器

壺（6）

表探資料である。口径22cm（復元値）を測り、口縁部は外上方に伸び、端部を肥厚させる。体部はやや細長い球形をなすものと考えられる。器表面の摩滅が著しく、調整は不明である。

須恵器

杯・壺・壺があるが、時期的に幅が認められる。

壺（7～11）

5点ともA区第II層出土である。7は口径17.2cm（復元値）を測り、外上方に伸び、端部近くで大きく外反する。回転ナデ調整を施す。

底部は端部にハの字形に開く高台を付すものと、まっすぐに下る高台を付すものがある。高台径9.6～12.6cmを測る。残存部は回転ナデ調整を施す。9については、内底面に暗緑色の自然釉が認められる。11は底部径10.6cmを測り、底部は平らで、体部下半は外上方へ伸びる。成形にあたっては、粘土板を底部とし、その上に粘土紐を巻上げている。外面は底部近くを回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整を施す。

壺（12・13）

12はC区第II層、13はA区SK13出土。12は口径21cm（復元値）を測り、外反して上方へ伸び、端部は外傾する面をなす。回転ナデ調整を施し、口縁端部に部分的に暗緑色の自然釉が認められる。13は口径37.8cm（復元値）を測り、内湾気味に上方に伸び、端部を外方へ弱く屈曲させ、内傾する面をなす。端部近くに弱く凸帯を1条巡らせる。残存部は回転ナデ調整を施す。

7～13については、9世紀前半の資料と考えられ、吉志部瓦窯操業期の遺物と考えられる。但し、胎土等からみると、吉志部瓦窯、あるいは当地周辺で生産されたものではなく、西播磨と考えられ、工房で使用されたものと考えられる。

杯（15・16）

15はA区第II層、16はC区第II層出土。口径14～14.6cm、器高3.3～3.8cmを測る。比較的平らな底部から、口縁部が弱く外反しながら伸び、端部は丸くおさめる。底部はヘラ切後、ナデ

調整を施し、他は回転ナデ調整を施す。

皿 (17)

C区第II層出土。口径15.8cm（復元値）、器高2.5cmを測る。平らな底部から口縁部が外上方へ直線的に伸びる。器表面の摩滅が著しく、調整は不明。

臺 (18・19)

18はA区SK17、19はA区第II層出土。18は口径20cm（復元値）を測り、外反気味に上方へ伸び、端部を内外双方に突出させる。頸部に断面三角形の凸帯を一条を巡らせる。

19は平高台で、底部は糸切痕が認められる。

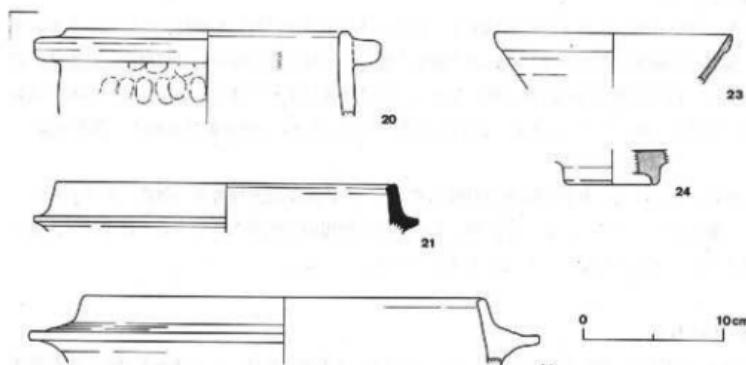
甕 (14)

A区第II層出土。口径28.6cm（復元値）を測り、大きく外反して伸び、端部は内外双方に突出させる。回転ナデ調整を施す。

土釜 (第37図20)

A区第II層出土。土師質で、口径20cm（復元値）を測る。鉢は太く、水平に短く伸びる。口縁部は短く垂直に伸び、端部は水平な面をなす。器表面の摩滅が著しく調整は明らかではないが、内面に粗いハケ目が認められる。菅原正明氏の分類の摂津C型に当る。

14～20については平安時代後半の資料と考えられる。



第37図 出土土器実測図 (2)

鎌倉時代（第37図）

土蓋（21・22）

A区第II層出土。21は須恵質で、口径29.4cmを測る。口縁部は内上方に直線的に伸び、端部は内傾する面をなし、鍔は短く水平に伸びる。22は土師質で口径28.4cmを測る。口縁部は弱く内湾気味に上方に伸び、端部は内傾する面をなし、鍔は水平に伸びる。口縁部から鍔にかけて段をなす。

白磁（23）

玉縁状口縁の碗で、口径16.7cm（復元値）を測る。胎土は粗く、灰色気味の白色をなし、釉調は灰色を帯びた白色をなす。細かい貫入が認められる。

青磁（24）

碗底部の細片で、高台径5.6cm（復元値）を測る。釉調は青味を帯びた緑色をなし、高台内面は露胎である。胎土から龍泉窯系青磁と考えられる。

第5章 まとめ

今回の調査は、窯体、排水溝以外では初めてのまとめた調査であり、粘土探掘坑と想定される土坑群の検出によって、造瓦所としての吉志部瓦屋の操業工程の一端を捉えるとともに、一帯の環境の変遷を層序的に把握することができた。

調査区では、3時期の遺構面、及び自然面を検出したが、瓦窯操業期の遺構形成層である第IV層（第2次面）が、当地一帯の環境変遷の大きな画期として捉えられる。

瓦窯操業期以前については、第VI層（白灰色粘土層）において樹木の株跡、及び風倒木の痕跡と考えられる小穴群を検出し（第3次面）、自然環境の想定がなされた。

調査地一帯は、洪積丘陵が雨水等の開析作用や堆積作用を大きく受けているために、水道的な浅い自然流路が多く認められ、起伏の強い地形をなし、その微高地上に樹木が密生していた自然環境が想定される。従って、集落環境としては、良好な状況ではなかったと考えられ、遺構、遺物も認められない。

又、第V層も洪積層の二次堆積層と考えられ、粘土層、及び砂質土層の不安定な堆積状況を示しており、遺構・遺物は検出されていない。

この第V・VI層の堆積時には調査地一帯は絶えず、洪積丘陵が開析、及び堆積作用等を受ける、不安定な地であったと考えられる。

第V・VI層の堆積時期については、遺物の出土が認められないことから、明らかにできなかつた。

第IV層黄色粘土層は調査区全域で認められ、平準な堆積を示しており、一帯はそれ以後比較的安定した状況が窺える。

そして、この黄色粘土を探掘するための探掘坑が検出され、その掘削状況、及び瓦窯群やクロビットが検出された製作工房との位置的な関係からも、これらの探掘坑が吉志部瓦屋に付属する、原料土探掘のためのものと判断された。（第2次面）

探掘坑の検出範囲は限られているが、SD01との関連を考えると、東西に走行するSD01が延長135m以上にわたることから、探掘範囲は東西方向に、かなりの範囲にわたるものと考えられる。

又、掘削範囲は、溝SD01をその南限としている可能性が高く、さらに南方にも黄色粘土層の堆積が認められるが、探掘坑はSD01以南には展開していない。従って、粘土探掘範囲は粘土の堆積状況といった地質条件等に関係なく、当初からその範囲が決められていたものと判断される。

探掘坑の平面的な展開をみると、ほとんどの探掘坑は重複することなく、密集しながらも、SK08の北側、及び西側に認められるように、部分的に探掘時の通路等の空間を有して、規則的に展開している。

粘土を採掘した層序をみると、SK 07は黄色粘土層以下の粘質土層まで掘削が及んでいるが、15基の採掘坑の中では、黄色粘土層(第IV層)より下層を掘削しているのは、この1基だけである。従って、黄色粘土層以外は原土としては適さなかったものと考えられる。

又、SK 10についても、中央を部分的に掘り下げているが、この深堀部分によって、下層の粘土の性状を確認したものと考えられる。

各採掘坑の採土量については、検出時点での掘削深度(黄色粘土の層厚)は4~27cmと浅く、バラツキが多い。これららの採掘坑は粘土採掘後放置され、

廃窯後、中世にかけての一時期に、短期間に埋ったものと考えられるが、以後、一帯が大きく削平されている可能性が高いことから、正確な採掘量については明らかにできなかった。

平面積を考えると、きわめて小規模なSK 04、SK 09を除くとSK 10が7.4m²、SK 12が6.48m²と比較的近く、SK 03、SK 07はその約2倍、SK 08、SK 10、SK 13はその約3倍に近い数値となる。完掘できた採掘坑が限られるが、SK 10・SK 12が1回の採掘の最小単位である可能性が高いと考えられる。

以上のように、粘土採掘範囲が溝SD 01を南限として規定されており、各採掘坑も平面形は長方形に近く、一定の採掘量が考慮されており、きわめて計画的に採掘を行なっているものと考えられる。

次に、出土遺物についてみると、大半が中世包含層からの出土であるが、石鐵をはじめとする弥生時代の遺物については、千里丘陵東南の沖積平野上では、従来、茨木市東奈良遺跡から本市垂水遺跡までには、十分な発掘調査の実施された遺跡ではなく実態は明らかではないが、丘陵上の新芦屋遺跡をはじめ、都呂須遺跡、吉志部遺跡等で遺物の出土が確認されている。従って、今回の出土例を含めて、丘陵上でも弥生時代の遺物の出土が、量的に多くはないが認められることから、周辺に当該期の遺跡の存在が考えられる。

又、鎌倉時代の遺物の出土についても、周辺では七尾瓦窯跡、吹田操車場遺跡等で遺物の出土が確認されており、周辺に、比較的大きな中世村落の存在が考えられる。これについては、承平七年(937)、「醍醐雜事記」に記載のみられる吉志荘内には、まとまった莊園村落の存在が予想され、この周辺に存在する鎌倉期の中世村落も、かかる集落との関係が想定されるかもし

表2 粘土採掘坑一覧表

造構	形態	深さ(m)	面積(m ²)	採掘量(m ³)
SK 01	長方形	0.21~0.27		
SK 02	不整形	0.21~0.35		
SK 03	不整形	0.25	12.54	3.14
SK 04	楕円形	0.08		
SK 05	不整形	0.07~0.1		
SK 06	長方形	0.07~0.15		
SK 07	長方形	0.27	11.3	3.05
SK 08	長方形	0.27	20.6	5.56
SK 09	長方形	0.05~0.09		
SK 10	長方形	0.16	21.05	3.37
SK 11	長方形	0.08~0.26		
SK 12	長方形	0.04	6.48	0.26
SK 13	長方形	0.07	17.18	1.2
SK 14	不整形	0.08~0.1		
SK 15	長方形	0.06	7.4	0.44

れない。

瓦については、平城期のものが、平安初期の瓦と混在して出土している。その量は全出土瓦の半数近くを占めるとともに、軒瓦は全て平城期のものである。従って、平城期の瓦については量的にも、単に混入したものとは考えられず、吉志部瓦窯内にも、一部重複して聖武朝期の瓦窯の存在も推測される。昭和43年度の大坂府の調査においては、この点は確認されていないが、今回の調査結果を考慮すると、神社東方の七尾瓦窯跡に近い丘陵斜面に窯の存在する可能性も考えられる。但し、他の調査成果も考慮すると、瓦窯群の西方にまでは及んでいないと考えられる。

平安時代初期の瓦については、細片が多く、大阪府の発掘調査、及び市史編纂に伴なう瓦の整理作業の成果以上に新たな瓦範の確認の追加はできなかった。

又、吉志部瓦窯の調査では綠釉瓦や綠釉陶器を焼成していたことが明らかにされている。

今回の調査においても、硬質の胎土の綠釉陶器の瓶ないしは水注と思われる体部細片1点だけ出土しているが、さらに広範な調査が必要である。

なお、出土した須恵器については、胎土等の観察からみると、周辺地で製作されたものではなく、播磨産の可能性が高い。これらについては、工房等で使用されたものと考えられるが、その流通等を考える上で注目される。

その他の遺物としては、平安時代後期の須恵器、土釜等の日常雑器が出土している。当該期の遺物の出土は周辺では知られておらず、北方の工房址の調査においても、平安時代末期の黒色土器が出土しているが、その性格については、今後の調査に待たなければならない。

最後に調査において明かとなった、吉志部瓦屋の造瓦の問題点について検討を加えたい。

粘土探掘坑については、調査例は少ないが、現在、関東地方での調査例が増加しており、埼玉県鳩山窯跡群、東京都多摩ニュータウンNO.146遺跡、群馬県藪田東遺跡等で、奈良から平安時代にかけての須恵器窯跡に伴なう例が、又、畿内では中世のものとして、平城京右京、兵庫県神出古窯跡群において検出されている。平城京例を除いては、いずれも須恵器窯跡に関連するものである。

多摩ニュータウンNO.146遺跡で検出された探掘坑は坑道と竪穴を持っており、個々の探掘坑が一時期の探掘単位と判断されるが、探掘量については各探掘坑で差が認められる。又、藪田東遺跡の探掘坑は所々に掘りこまれて、その探掘状況に応じて連続的な掘削を繰り返して拡張しているために、形態的には不整形となっており、比較的無作為に掘削が行なわれていることが報告されている。

このように、検出された探掘坑は遺跡間によって形態、規模(探掘量)、探掘方法等の差が大きく、各地における生産状況に適した、最も効率的な探掘が実施されているものと考えられるが、掘方については、比較的無作為に行なわれている。調査例が少ないとから、単純な比較はできないが、吉志部瓦屋のきわめて計画的な粘土探掘状況とは大きく異なっており、造瓦工人の組織体制の整備された官窯としての吉志部瓦屋の特殊性が指摘できよう。

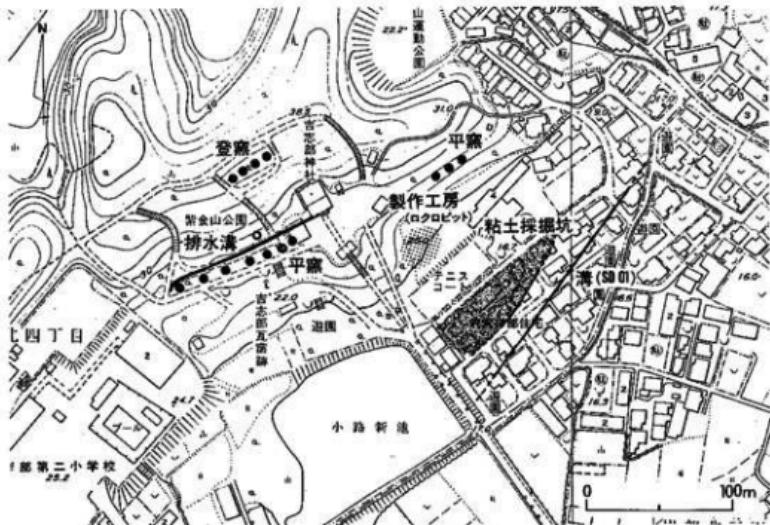
粘土採掘坑、工房、窯の相互の関連については遺構が限られることから詳細な点については不明であるが、粘土採掘場が丘陵直下の最も低い地点に位置し、その上方の丘陵部分に平坦面を造成して製作工房とし、さらに、その上方に窯を築いているというように、各作業場が整然と分離している可能性が高い。又、採掘坑、工房、窯は近接しており、吉志部瓦屋の生産活動が非常に計画的に、そして効率的、集中的に行なわれたことが考えられる。

このように、それぞれの作業場が独立していることは、各作業工程が明確に分けられていることを示しており、作業に従事する工人等が異なっていた可能性も考えられる。

又、採掘坑がその堆積状況から、採掘後は瓦窯閉窯にあたっても特に埋め戻されたとは考えられないが、対照的に瓦窯背後の排水溝が溝内の堆積状況から、閉窯時に人为的に埋め戻されたと考えられる状況を示しているのとは大きく異なっており、各作業場での閉窯時にも対応の差が認められる。

吉志部瓦屋が機能した範囲については、瓦窯から粘土採掘坑までの南北80mの範囲が想定され、非常に広範囲にわたるものである。

瓦、あるいは土器の製作において、原料粘土の採掘、粘土の精製、整形、調整、焼成といった一連の作業工程について、採掘坑、及び工房の確認によって、その工程の具体的な把握が可能になった。今回の調査は造宮瓦窯の操業実態の一端を明らかにした点で大きな意味を持つものと考えられる。



第38図 吉志部瓦屋遺構全体図

〔参考文献〕

- 藤沢一夫 「摂河泉出土古瓦の研究」「仏教考古学論叢」 昭和16年
鍋島敏也 「吉志部瓦窯跡発見の瓦」「古代学研究38号」 昭和38年
藤沢一夫 「造瓦技術の進展」「日本の考古学VI」 昭和42年
藤沢一夫・堀江門也 「岸部瓦窯跡発掘調査概報」 大阪府教育委員会 昭和43年
網干善教編 「次田市史第8卷」 昭和56年
吹田市教育委員会 「昭和61年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報」 昭和62年
田中純夫 「No146遺跡」「多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度」
（財）東京都埋蔵文化財センター 昭和61年
原 雅信、他 「薮田東遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和51年
日本考古学協会 「日本考古学年報38」 昭和62年
森下恵介 「平城京右京四条一坊十五坪」「奈良市文化財調査報告 昭和55年度」 昭和56年
山仲 進、他 「神出」 昭和61年
小林行雄 「統古代の技術」 昭和55年
大川 清 「日本の古代瓦窯」 昭和55年



南西から

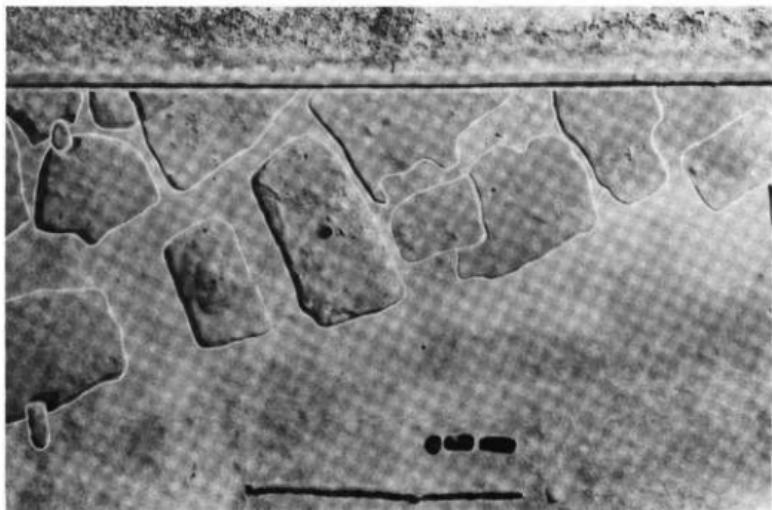


北東から

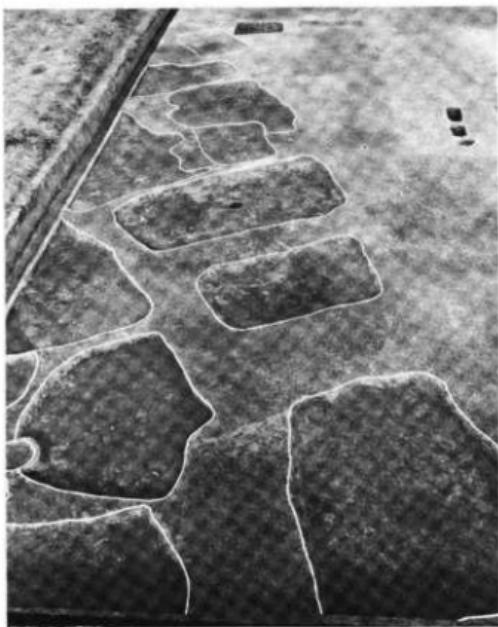
図版二
調査地点
航空写真



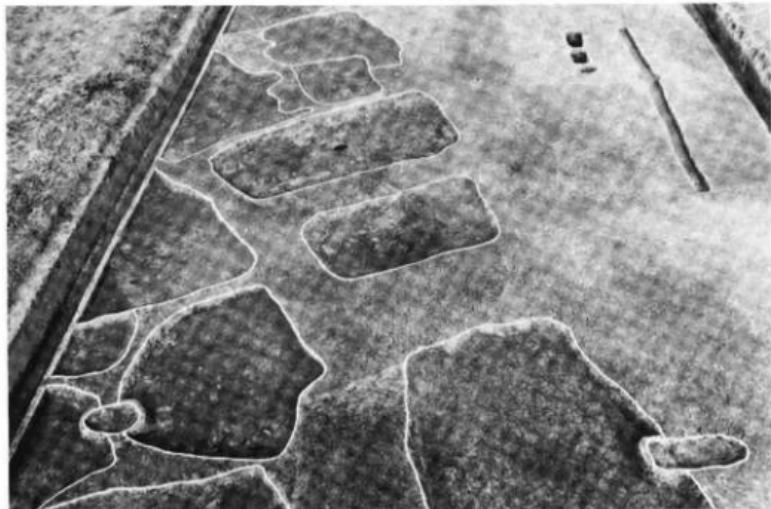
調査地点全景



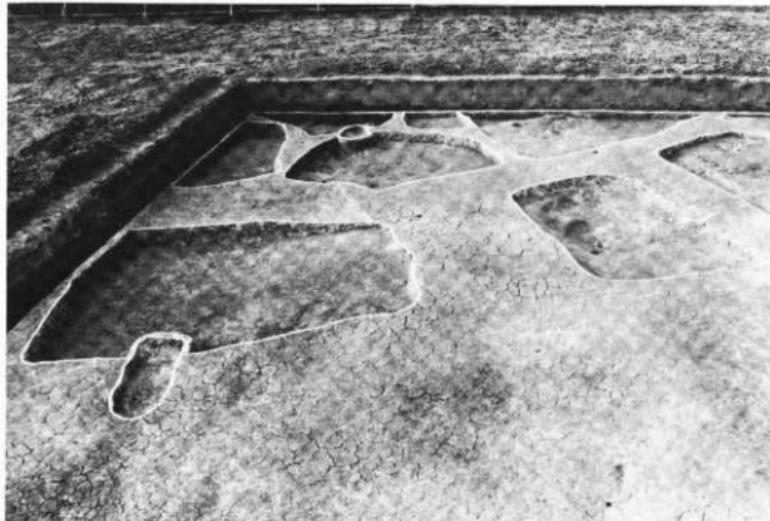
A区粘土接觸坑



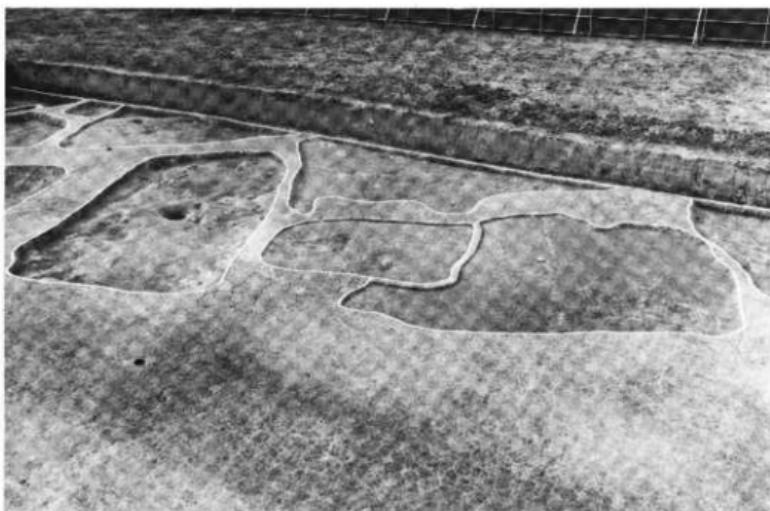
A区粘土採掘坑検出状況
(南西から)



A区粘土採掘坑検出状況(南西から)

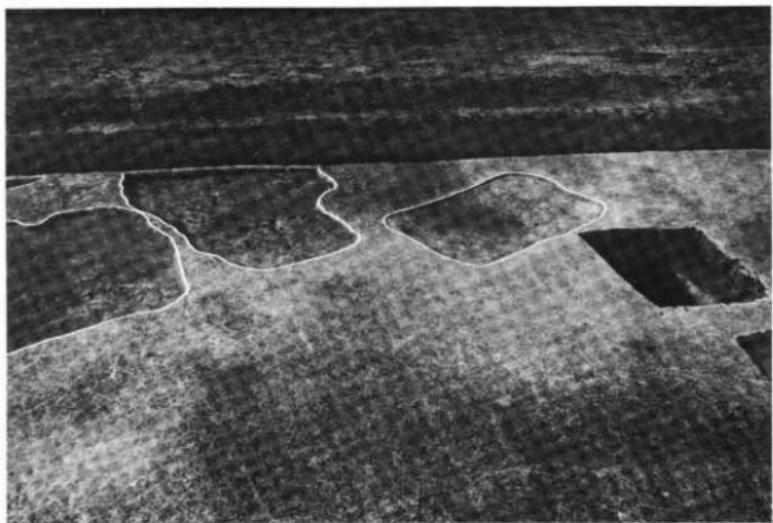


SK 01~10(南西から)



SK 10・11・12・13(東から)

図版五
A区粘土採掘坑
検出状況
(2)

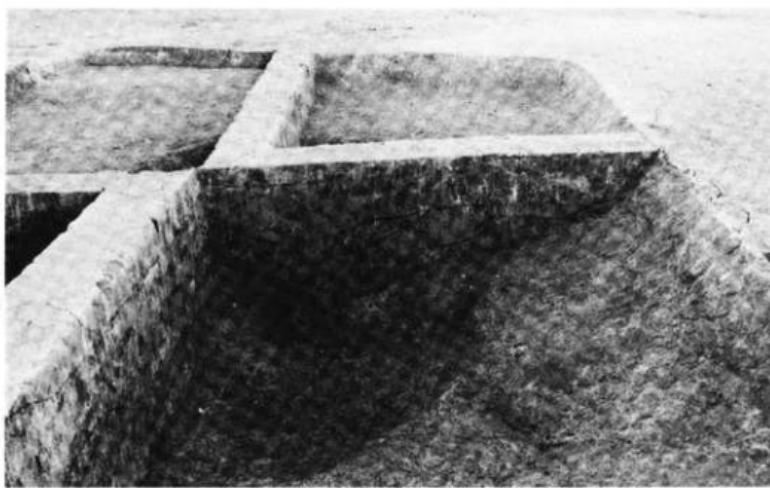


SK 13-14-15(東南から)



SK 08-09(北東から)

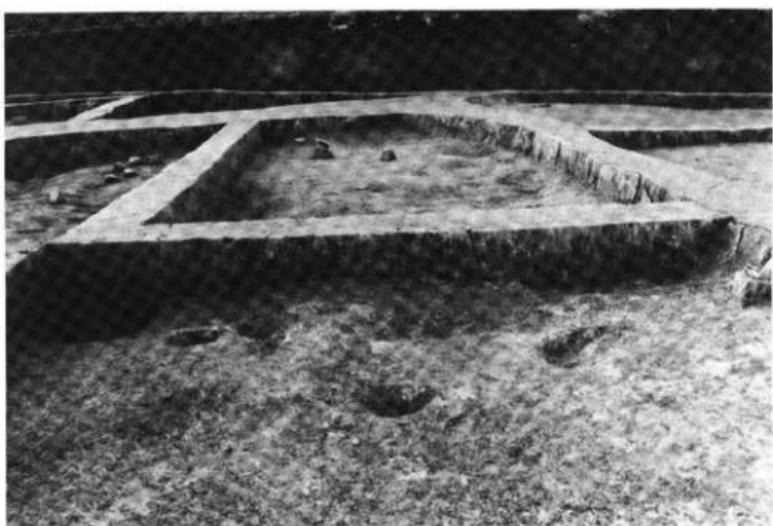
図版六
粘土採掘坑
検出状況
(3)



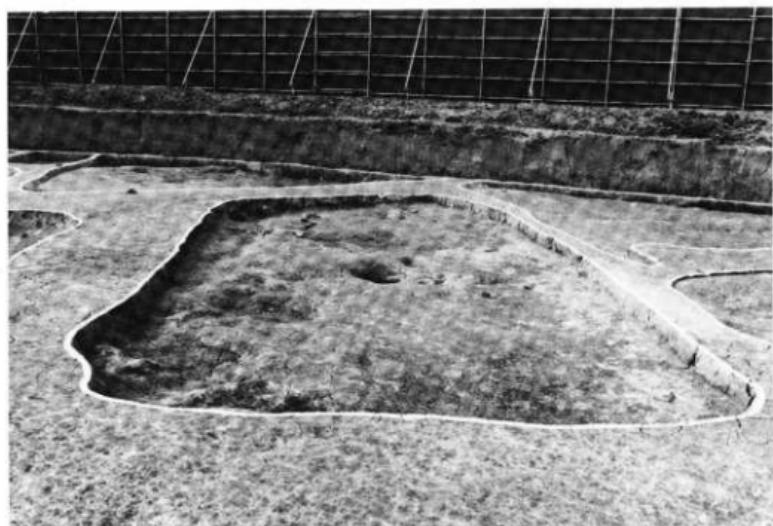
SK 07 堆積状況(西から)



SK 07(西から)

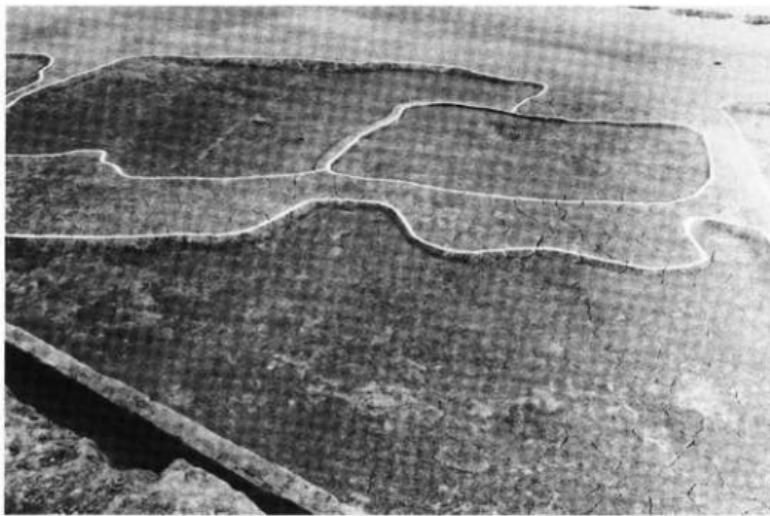


SK 10 堆積状況(東から)

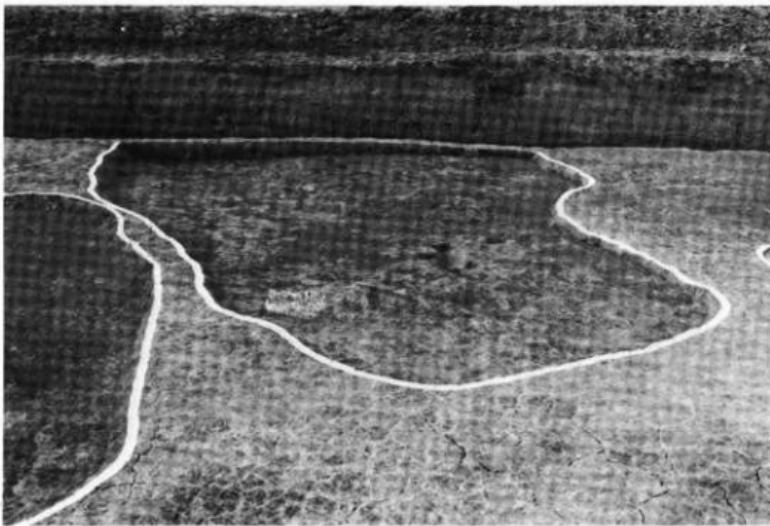


SK 10(東から)

図版八 A区粘土採掘坑 検出状況 (5)

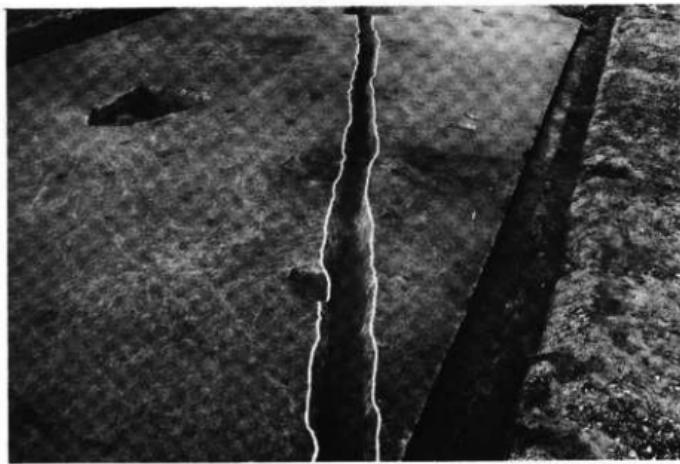


SK 11-12-13(西から)

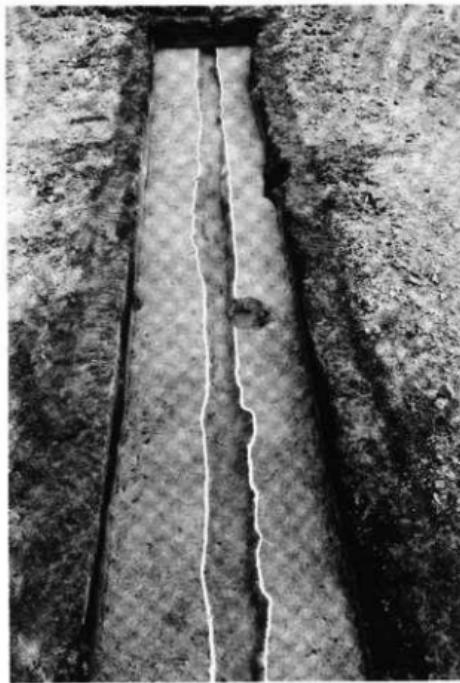


SK 14(南東から)

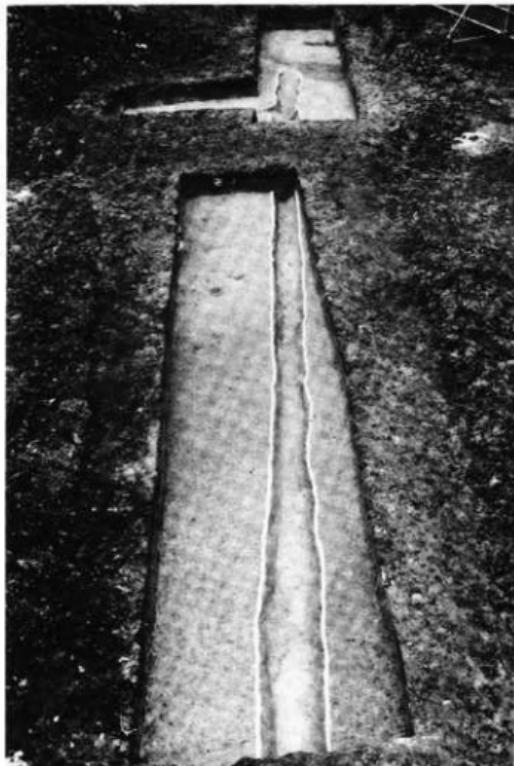
図版九 溝検出状況(1)



C区検出状況(南西から)



T1検出状況(北東から)



T2, T3検出状況(南西から)



SD 01 堆積状況



軒丸瓦(難波宮6303型式)出土狀況(A区)

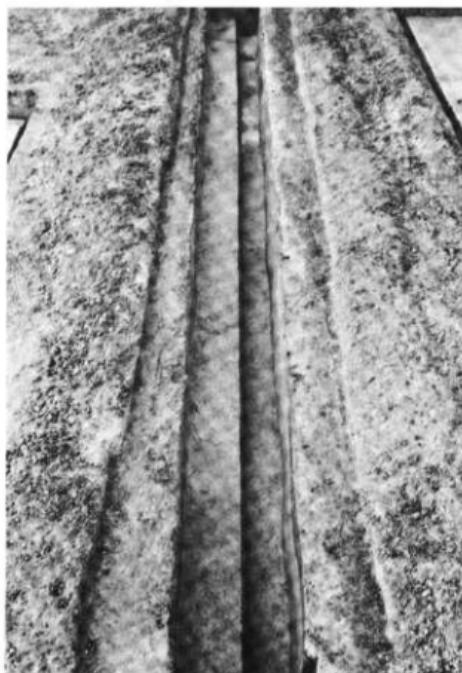


石鐵出土狀況(A区)

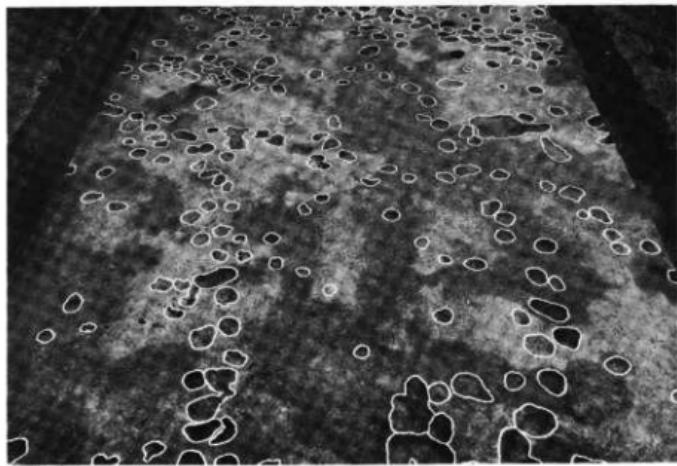
図版一二 B区
調査状況



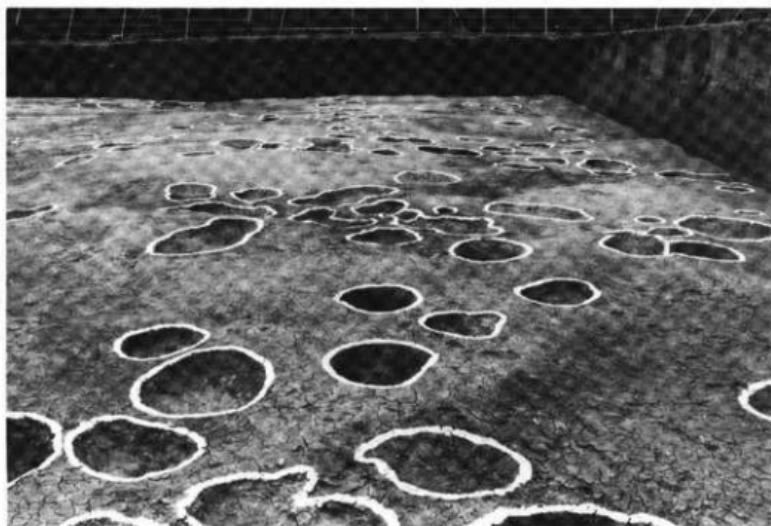
東壁土層断面



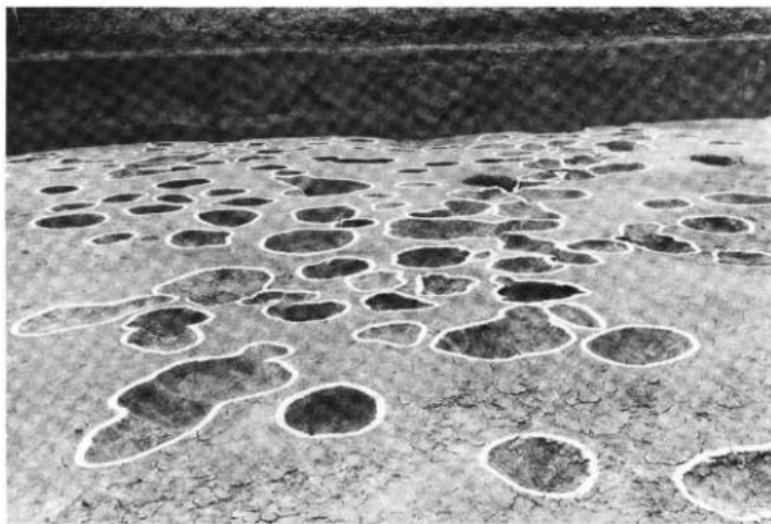
B区調査終了後(南東から)



図版一四 A区小穴群 検出状況(1)

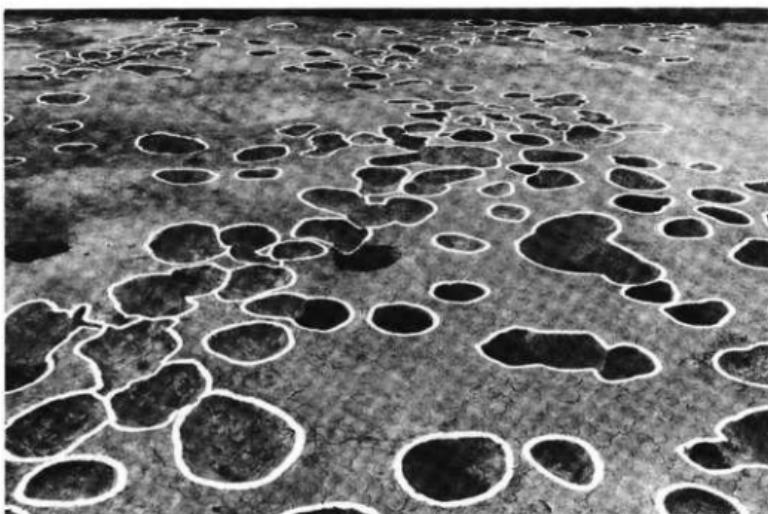


北東から

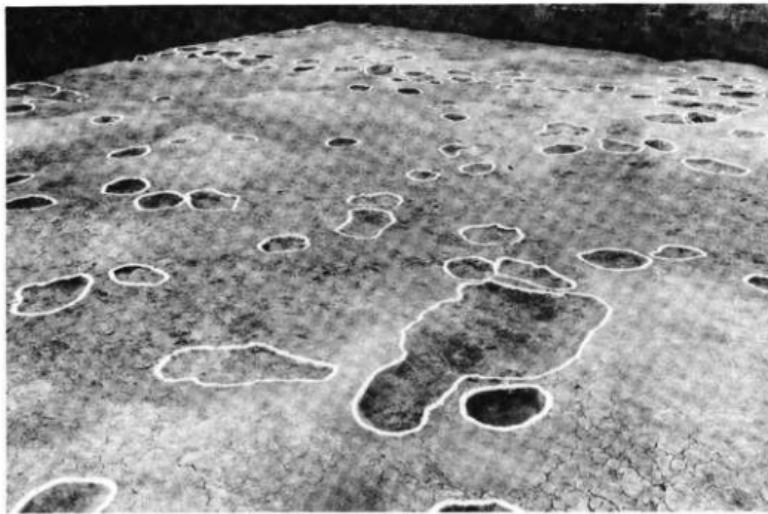


南東から

図版一五 A区小穴群 検出状況 (2)

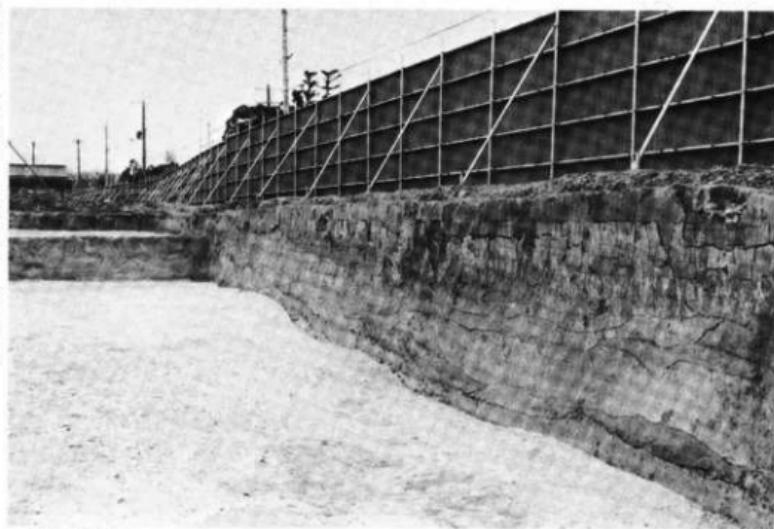


北西から

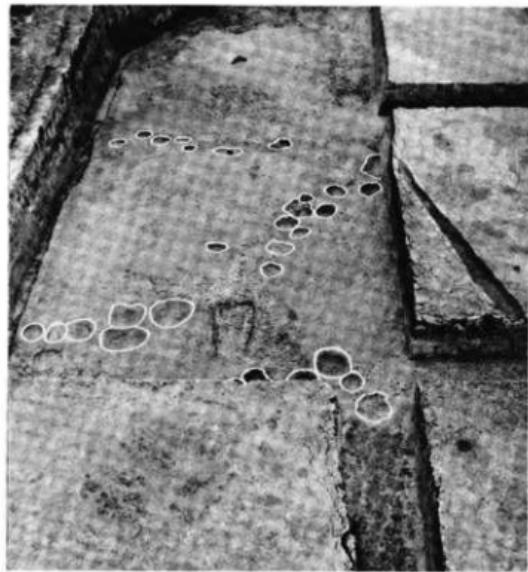


北東から

圖版一六
C區第3次遺構面
檢出狀況

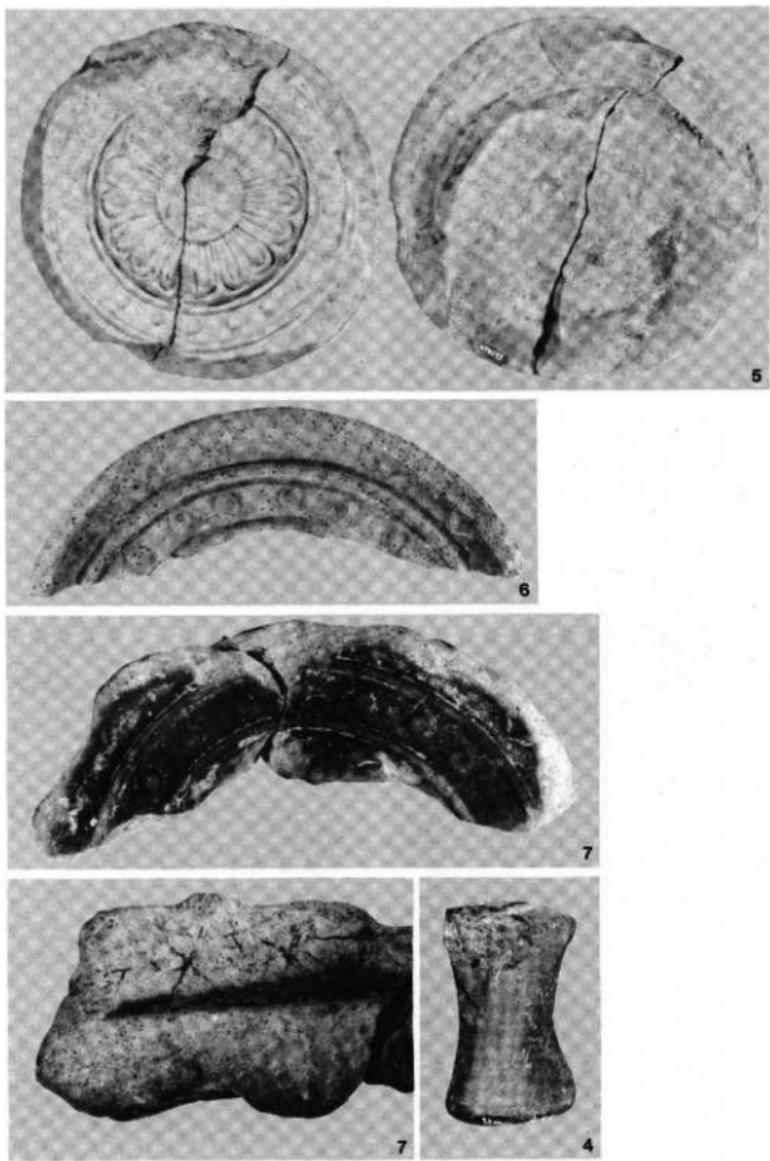


北壁土層斷面

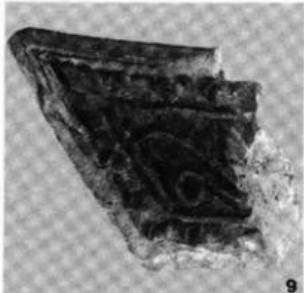


小穴群檢出狀況

圖版一七 出土瓦・窯道具(1)



圖版一八
出土瓦
(2)



9



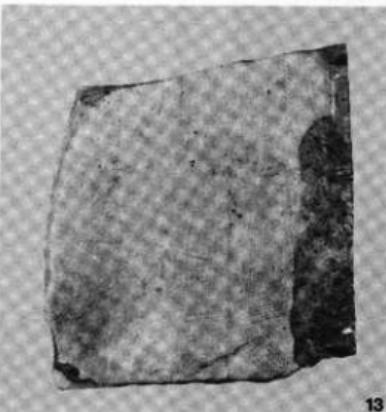
8



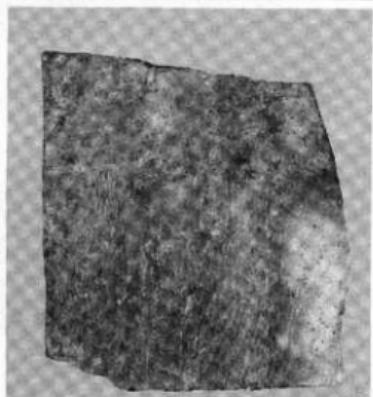
10



10



13



13